

針葉樹会報

第 117 号
2010 年 3 月



目次

2009年 禁断の東チベット踏査行	澤木
「未踏の氷河と6000m峰を目指して長駆5000km」	中村
私の現役時代	一夫 保

追悼／山崎廣氏	26
山崎さん、80代のロマン・佐々	28
山崎さんと登った白山	31
山崎さんの思い出	32
追悼 山崎さん	36

父の遭難	29
山崎	31
貫 浩	32
隆夫	26
博 恭	28

三月会通信	43
トピック	36

編集後記	44
撮影・中村保	44

発行日 2010 年 3 月 31 日
発行者 針葉樹会報
(会長 竹中彰)
印刷所 ヤマノ印刷株

針葉樹会報
第 117 号

編集人 小島 和人
〒241-0817
横浜市旭区今宿町 2-60-1
会報幹事／小島和人、井草長雄
川名真理

2009年 禁断の東チベット踏査行 「未踏の氷河と6000m峰を 目指して長駆5000km

中村 保（昭31年卒）

（10月12日～11月17日）

プロローグ——許可問題

「禁断の」と書いたのは、2009年秋の東チベットでは外国人が未開放地域に入ることが厳しく規制されたためである。3月にはチベット自治区創設40周年記念行事に反発するチベット仏教徒の騒動が警戒され、ダライラマ14世が新中国の弾圧を逃れてインドに亡命した1959年から40年経つても不穏な動きの胎動に当局は神経を尖らせた。

10月には中華人民共和国建国60周年祝賀行事の円滑な遂行のため、ラサでは10月1日の国慶節の前後3日間は外国人の移動をも禁止するほどの厳戒態勢が敷かれた。この厳しい規制は外国人のみならず中国人にも及んだ。

こうした状況の中で外国人の旅行者は川藏公路や青蔵公路などの幹線道路だけを通行す

る観光旅行しか許可されなかつた。未開放地区へ入る許可証を旅遊局・外事局・西藏軍区からもらつても、公安当局は外国人が幹線道路から外れて行動することを禁止した。2009年の秋は神戸大と武漢地質大学の日中合同登山隊が崗日嘎布山群第二の高峰K.G 2（6805m）初登頂の快挙が唯一の成果である。ほかの外国登山隊は許可問題があるため敬遠した。踏査隊も同様で、大阪の城隆嗣さんたちのグループは国慶節をはさんで雲南から東チベットに入り、ゴルジュの国の玉曲と念青唐古拉山東部・波堆藏布の未踏の谷をターゲットにして入域したが、「こと」ごとく公安に阻まれてなす術なく帰国せざるを得なかつた。4000kmもの無駄なドライブに終わつた。我々と同じ場所、念青唐古拉山東部の金嶺の大氷河を目指したスイス人と英国人のペアは、我々が着く2日前に辺境の公安から追放されてラサへ引き返した。

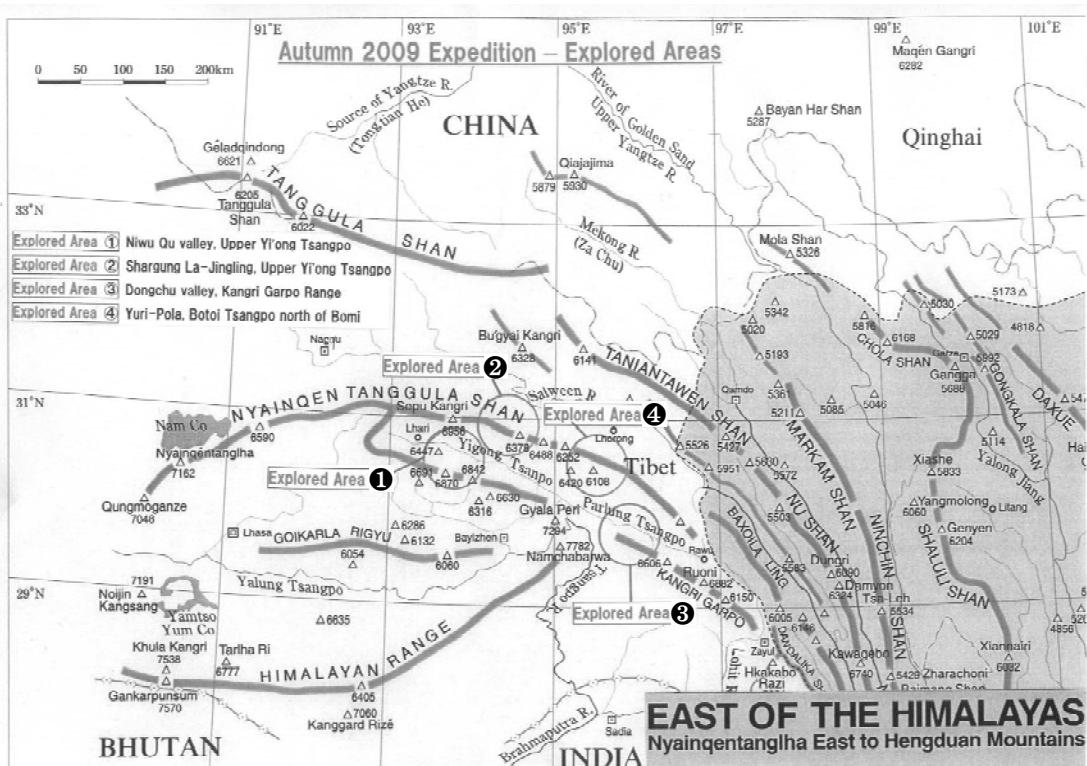
ラサを出發してラサに戻るまで、我々の5週間の旅の間で外国人を見かけたのは2回だけである。日本人には会わなかつた。例年では考えられないことである。城さんたちは29回も公安のチェックを受けたと聞く。我々も宿泊したすべての県庁所在地と郷（県のなかの行政単位）でガイドが公安に出頭し、時には日本人メンバーも呼び出しを受けた。

こんな厳しい環境の中で、我々が許可問題をクリアーし多大な成果を持ち帰ることができたのは「強運」の賜物であつた。優秀なチベット人のガイドが付いてくれたこと、例年にない好天に恵まれたことで効率よく行動でき、短期間に四つの未踏の谷を踏査することができた。なかんずく、ガイドのアワンの理解判断能力、英語力、情報収集能力、公安警察との交渉能力に負うところが大きかつた。そして、「My camera produces blue sky. As always I found peaks shining before my lenses」今度の探査行でも私が「Man of Blue Sky」であることが立証された。

東チベットほどではないにしても、2009年はチベットの他の地域でも規制があつた。例えば、アーワンはこう話してくれた。
(1) チヨモランマ、チョーオユー、シシャパンマへのグループツアーも国慶節の前から厳しい規制が始まつた。

(2) 8月に10名のドイツ人トレッカーがチヨーイオユーに入ったが、インド国境に近いため、一人ひとりに兵隊がついた。
(3) シガツエでさえ外国人は許可証の提示を求められた。
(4) カイラースへの道も許可は厳しかつた。
(5) シックキムとの国境に近いヤドンへの許可是不可能である。

2009年秋、東チベット踏査ルート



踏査地域とメンバー

踏査地域（「曲」は川を意味する）は、

①念青唐古拉山東部 易貢藏布の支流・尼屋曲—アイガゴン氷河とその周辺

②念青唐古拉山東部 易貢藏布の支流・夏曲—金嶺郷のジャンボ措（湖）とマライポ氷河

③崗日嘎布中央部 帕隆藏布の支流・秋朗藏布の源頭

④念青唐古拉山東部 帕隆藏布の支流・波堆藏布の玉仁の北側

メンバー

日本人——横断山脈研究会 中村保（74歳）、
永井剛（77）、新谷忠男（65）
中国人——四川大地探検公司社長 張繼躍
(45)

現地スタッフ——ガイド アワン（チベット族・31）、運転手 シュエ（漢チベット族・46）、ノルブ（チベット族・33）、コック ダワ（チベット族・37）

探検史の概略

踏査地域① 易貢藏布上流部——尼屋曲の谷からラチン・ラ峠
① 1935年 ブラントハンター、フランク・キングドンウォードは通麦から易貢藏

布を通り、恐しいゴルジュを通過して尼屋に達した。そこから支流の尼屋曲に入り、その源頭にあるラチン・ラ 5300m を東から西に越えた。彼はニオト・サマ（現在のビヨン村）についての記述を残している。

〔2.〕 1947年 ブラントハンター、フランク・ラドローの仲間であるヘンリー・エリオットはショガ・ゾン（八松湖の北西、現在の朱拉）を7月25日に発つてラチン・ラを西から東に越えて尼屋曲に入りニオト・サマに下つて植物採集を行つた。

〔3.〕 2000年 3月から4月にかけて英国人のジョン・タウンとニコラ・マートが新中国になつてから外国人として初めて尼屋曲に入つた。彼らは嘉黎から易貢藏布上部を自動車道に沿つて下つて尼屋（現在の忠玉郷）に来て、尼屋曲を遡りネナン 6870m と周辺のピークの北西面を偵察した。

〔4.〕 2002年 中村と川畑の横断山脈研究会のメンバー2人で10月末にブンカーからラチン・ラに達したが、峠は雪深く馬方が尼屋曲に下ることを拒絶したので来た道を引き返した。

〔5.〕 2003年 9月から10月にかけてアダム・トーマスをリーダーとする英國隊が嘉黎から尼屋を経て尼屋曲に入り、チュクボリスム 6359m の北面にチャレンジし

た（不成功）。登山の後ラチン・ラを越え、さらにケン・ラ（ジエ・ラ） 5238m を越えて嘉黎に戻つた。

〔6.〕 2006年 スイスの登山家ブルース・ノーマンドは嘉黎から尼屋を経て尼屋曲に入りラチン・ラを越えてブンカに下つた。

〔6.〕 2006年 スイスの登山家ブルース・ノーマンドは嘉黎から尼屋を経て尼屋曲に入りラチン・ラを越えてブンカに下つた。

〔6.〕 2000年 英国の登山家、ドクター・チャールス・クラークは北西の谷を下つて金嶺に入り、ジャンボ湖とマライボ氷河を見ついた。

〔6.〕 2000年 英国の登山家、ドクター・チャールス・クラークは北西の谷を下つて金嶺に入り、ジャンボ湖とマライボ氷河を見ついた。

踏査地域② 易貢藏布上流部北側——歴史的な峠シャルグン・ラから金嶺地区

〔1.〕 7世紀 唐の時代、文成公主が33代目のチベット王、ソンツエン・ガンポに遙か長安から嫁いだとき、往時の北京（ラサ街道）を辿りシャルグン・ラ 5260m を越え、金嶺を通つてラサに着いた。

〔2.〕 1846年 フランスの神父、ユックとガベは3年にわたる北京（ラサ）マカオの大旅行の途上、春にアランドから辺境に向かうときにシャルグン・ラを越えた。

〔3.〕 1882年 インド測量局から派遣されたパンディットA-K、キシュン・シンは9月14日に辺境からシャルグン・ラを越えて金嶺に入った。当時金嶺は4軒の家と駅亭があつた。

〔4.〕 1922年 英国のジョージ・ペレイラ准将は9月25日にシャルグン・ラを越えて金嶺に着いた。ペレイラは東からラサに到達した最初の英國人である。

〔5.〕 1998年 ク里斯・ボニントン率いる英國色浦岡日（セブ・カソリ）登山隊のメンバーが西から東へシャルグン・ラを越えた。

〔6.〕 2000年 英国の登山家、ドクター・チャールス・クラークは北西の谷を下つて金嶺に入り、ジャンボ湖とマライボ氷河を見ついた。

〔6.〕 2000年 英国の登山家、ドクター・チャールス・クラークは北西の谷を下つて金嶺に入り、ジャンボ湖とマライボ氷河を見ついた。

踏査地域④ 波密の北側——帕隆藏布支流・波堆藏布

〔1.〕 1935年 英国の探検家、ロナルド・コールバスクとハンバリー・トレーシーが波密から波堆藏布を通過する旅をした。南北に通じる交易路を辿り玉仁を経て 5000m を超える分水嶺を越えて北京（ラサ街道）に出てサルワイン川（中国名：怒江）上流部の探査を行つた。

〔2.〕 2002年 11月に中村と川畑が玉仁北西の則普氷河とジャロン氷河周辺の未踏峰を探査した。

[3.] 2006年 10月下旬に外国人として初めて中村のパートナーが玉仁の東の谷、リンドウ谷に入り新氷河湖の手前まで踏査した。

[4.] 2007/08年 各年の9月に、大阪の城隆嗣とパートナーは玉仁東のリンドウ谷に入り、07年は偵察、08年はカヤックを使って5つの新氷河湖を航行し源頭まで踏破した。大変ユニークで価値あるプロジェクトである。

行程・天候・輸送

(総走行距離: 4991 km)

特に記述がないかぎり移動はトヨタ・ラングレーZERによる。気温は朝7:30~8:00に測定。標高は主として中村の高度計による。走行距離はラングレーZERで4881 km、モーターバイクで110 km、合計4991 km。10月12日に成田を発つて成都経由14日に空路拉萨に着いた。高度順化のため拉萨(3700 m)に3泊し、その間に念青唐古拉山西部のチュンモ・カンリ7048 m東面の写真を撮るためにソグ・ラ5300 mを往復した。

踏査地域①

10月17日 快晴 8°C ラサ→当雄4260 m→那曲4540 m (青藏公路)

10月18日	快晴 0°C	那曲→アヤ・ラ5150 m→嘉黎4500 m	10月29日	晴 0°C	馬でマライポ氷河を望むジャンボ湖右岸の4070 m地点を往復
10月19日	晴 0°C	嘉黎から易貢藏布上流部川を左岸ぞいに尼屋(忠玉郷)3400 mへ。	10月30日	晴時々曇 -1°C	金嶺郷→シャルグン・ラ→辺霸ヘ
10月20日	小雨後晴	11台のモーターバイクでのキヤラバンで尼屋曲の谷に入る。尼屋→ビヨン村3730 m→キャンプサイト3770 m (アイガゴン氷河の舌端手前)	10月31日	晴 -5°C	辺霸→普玉→バリ・ラ4790 m→ショパンド3550 m→洛隆3700 m
10月21日	曇時々薄日 1°C	アイガゴン氷河下部の全容の見える地点4230 mまで登る。	11月1日	曇 3°C	洛隆→デガ・ラ4460 m→サルワイン川(怒江)のほとり馬利3150 m
10月22日	霧後晴 0°C	(モーターバイクで) キヤンプサイト→ビヨン村→尼屋	11月2日	晴 0°C	馬利→サダ・ラ4310 m→モボ・ラ4750 m→メコン川→昌都3250 m
10月23日	晴 6°C	尼屋→嘉黎	11月4日	晴 0°C	昌都→空港4320 m→バングダ4080 m (以後こからラサまで幹線道路は川藏公路を辿る)→ニ・ラ4658 m→怒江橋2800 m→八宿3320 m
10月24日	晴 -5°C	嘉黎→那曲	11月5日	晴 0°C	八宿→アンジ・ラ4410 m→然烏3890 m→松宗3070 m→波密2740 m

踏査地域②

10月25日	晴 -7°C	那曲→達木寺(鳥葬場の觸體壁)→比如3010 m	10月27日	晴後小雪後曇 -2°C	尼木→カレ・ラ5000 m→辺霸3650 m
10月26日	晴 -2°C	比如→シェル・ラ5030 m→白嘎4080 m→尼木3830 m	10月28日	晴 -9°C	辺霸→シャルグン・ラ5260 m→金嶺郷3740 m
10月27日	晴後小雪後曇 -2°C	尼木→カレ・ラ5000 m→辺霸3650 m	10月29日	晴 0°C	馬でマライポ氷河を望むジャンボ湖右岸の4070 m地点を往復
10月28日	晴 -9°C	辺霸→シャルグン・ラ5260 m→金嶺郷3740 m	10月30日	晴時々曇 -1°C	金嶺郷→シャルグン・ラ→辺霸ヘ

踏査地域③

11月6日 曙後晴 -1°C 波密→秋朗村



ビヨン村の背後に迫るアイガゴン氷河の下部。
中央の山は 6030m 峰東面。

1. 禁断の易貢藏布——垂涎の尼屋(忠玉郷)
易貢藏布は東チベットで最も美しい川である。トルコ石色の清流が深いゴルジュを荒れ狂うように下り、逆巻く急流をつくり、ときには緩やかな流れに変わつて滝をつくる。川下りのプロにとつては課題として残されている

ハイライト

11月 7日	晴後曇	-7°C	C1～C2	3	490m～ユムツオ氷河展望	3650m	馬で秋朗蔵布源頭に向かう
C 2							
11月 8日	晴後曇後晴	-1°C	C 2～秋朗				
踏査地域④ 村(川蔵公路)～波密							
11月 9日	晴	3°C	波密～嘎瓦龍	380	0m～卓龍沟(樹葬)	3320m～波密	11月 10日 曙後晴 3°C 波密～玉仁郷 3
11月 11日	曇後晴	0°C	普拿～玉仁郷	30m	1000m～3600m 地点往復～普拿 34	3	3
波密							
波密からラサ(川蔵公路)							
11月 12日	晴	5°C	波密～古郷湖～通麦	2120m～色季拉(セティ・ヲ)	4500m～ナムチャバルワ・ギャラペリ展望台	11月 13日 晴 5°C 八一鎮～尼曲谷(ギンリガングガ 6250m 偵察)～工布江達 3	4600m～八一鎮 3100m
11月 14日	晴	3°C	工布江達～米拉山峠	4800m	4800m	11月 15日 晴 5°C ラサから空路成都	5013m～ラサ
11月 17日	成田帰着					11月 17日	

川である。比較的穏やかな上流部は嘉黎から尼屋まではすでに下降されているが、その先のゴルジュ帯の核心部から易貢措までの下流部は未踏である。私にとつても尼屋は東チベット踏査のなかで最も関心の強い場所である。

2001年6月に永井さんと嘉黎から尼屋を目指したが、地滑りと時間切れで果たせず、2002年秋には雪のためラチン・ラから尼屋曲の谷に下ることができなかつた。2005年秋には再び永井さんと下流から遡つたが、バケから尼屋へはゴルジュ帯の通過が極めて困難で危険と言われ断念した。2006年には再び易貢措から遡るためラサに来たが、アメリカ隊に先を越されたので計画を変更した(アメリカ隊は不成功だつた)。2008年に東北大山の会が試みたがバケの少し先から引き返した。私にとつて尼屋は憧憬と垂涎の地であり続けた。

10月 17日にラサから那曲にきて公安局に出て、嘉黎から尼屋に行きたい旨を申し出たが、嘉黎から先へ行くことは罷りならんと釘をさされた。が、ネバー・ギブ・アップ、翌日、嘉黎でガイドのアワンが公安と粘り強く交渉し、尼屋に行つたらすぐ戻るという条件付きで「見て見ぬふり」をしてもらうことにして成功

した。アワンの才覚のお陰である。

こうして19日には嘉黎からゴルジュ、針葉樹、紅葉の美しい易貢蔵布左岸沿い120kmの道を6時間弱のドライブで尼屋に着くことができた。外国人にたいする接触を公安が監視しているのだろうか、役所の人間の対応が冷やかである。馬によるキヤラバンが可能かどうかを確かめるために、村人から次の三つのルートに関する情報集めにガイドのアワンが奔走する。

①積年の思いがこもる易貢蔵布を易貢措まで下る

②支流の夏曲を北に遡りアランドをへて旧北京ラサ街道(Gya Lam)を通つて金嶺郷周辺の踏査をし、歴史的な峠、シャルグン・ラを北に越える

③尼屋の南側、6842m峰に通じる谷に入り、大氷河の末端まで行つて偵察をする

しかし、アワンが集めた情報では、三つとも馬のキヤラバンは不可能であることがわかつた。尼屋とバケの間の易貢蔵布のゴルジュ帯は1935年にキングドンウォードが通過して以降ここを通つた外国人は誰もいない。彼はその時の紀行 "Assam Adventure" の中で、下から見上げると空が稻妻のように見えるほどゴルジュは深い、時々トレインが消

えてクライミングを余儀なくされたと書いている。

近年は土地の人間の往来はほとんどないようだ。尼屋の人たちはほとんど知らず、アワンがようやく見つけた、ゴルジュ帯を通過したことのある村人の話では、道は危険でロープを使う場所が数カ所あるという。深いゴルジュが村人の往来を遮断している。

アランドへの夏曲の峡谷ぞいの道は、橋が随所で流失し通行不能、高い尾根を越えて行く道はあるが馬のキヤラバンは危険だった。6842m峰へは谷の下部は急流でトレイルはなくアクセス不可能だった。結局、尼屋曲の谷を西に遡りアイガゴン氷河周辺の踏査をすること、その後は長駆迂回して北側からシャルグン・ラを越えて金嶺郷に入る以外に選択肢はなかった。

尼屋曲へ入るべく馬のキヤラバン編成の交渉をアワンに命じたが、驚いたことに馬ではなくモーターバイクでなければ行かないと村人が言つているとの報告があつた。辺境のどこでも見られる現象で、モーターバイクが馬にとって替わつてゐる。「西部大開発計画」は僻遠の地にも及んでおり、道路建設と河川を利用しての水力発電所の建設が随所で進められている。交通手段や駄獣として馬の利用価値は急激に減つてゐる。また、東チベットの

嘉黎県を含む那曲地区は漢方薬である冬虫夏草がよく採れ、近年価格が暴騰してお陰でこの地域のチベット族は豊かになつてゐる。

10月20日、11台のモーターバイクで尼屋を出発した。道はさほど悪くないがラフなトレインで、時々降りて歩かされる。尼屋曲の谷は樹林帯で比較的開けてゐる。最初右岸を行き2回流れを渡る。アイガゴン氷河末端の手前のキャンプ地まで55km、大小15の村落があり、尼屋曲源頭のラチン・ラに通じる。バイクが使えるのはキャンプ地までである。最後の村落の中心がビヨン村で、探検記に出てくるニヨト・サマである。ここで民家に泊まらせてもらうべく交渉したがすべて断られた。公安からのお達しがあつたらしい。

キングドンウォードの Assam Adventure カラ引用しよう。() 内は中村注。

「ニヨト・サマ(ビヨン村)は文字通り氷に囲まれておひ、冬場は厳しい寒さに違ひない。ここでは大麦が栽培されているので、チベット高原のように高地ではなく、標高は12000フィートを少し超えている程度だろう。多分25000フィート近いピークが連なる山稜に取り囲まれた盆地にニヨト・サマはある。ここほど植物学者がキャンプするのに理

想的な場所は他に想像できない。

……中略……

主氷河（アイガゴン氷河）に着いたとき、私は遂にポ・ツアンボーの水源に到達したと自然に考えた。眼下の小さい湖（現在は存在しない）を離れて石榴花と針葉樹林の中の急で歩きづらい道を歩き始めた。高いセラックスに分断されて二段になつて下つている氷河を断崖越しに見ながら登つていった。」

キングドンウォードの記述は概ね正確であるが、次の二点で誤りがある。



シャルグン・ラへの道

①ピーカは25000フィートもない。最高峰は6870mのネナンである。
②ヤルン・ツアンボーの支流ポ・ツアンボーは通麦で易貢藏布（西へ）と帕隆藏布（東に）に分かれる。尼屋曲は易貢藏布の支流であり、本流の水源は嘉黎の西にある。

アイガゴン氷河の観察が我々の目的であった。この氷河は念青唐古拉山東部の氷河の中で最もユニークである。波堆藏布の則普氷河北のジャロン氷河と同じように、舌端が狭い谷の川に到達している。アイガゴン氷河の下部はクレバスと大きなセラックスが流れを荒々しく分断し氷瀑状となつて下つている。

上部は緩やかな雪原となつてネナンの西に連なるピーカに囲まれているのが成都・拉萨間の機上から見える。

10月21日、キャンプを出発してラチン・ラに通じるトレインを尼屋曲の左岸沿いに登つて行く。キングドンウォードの時代より道はよく整備されている。4320mの地点がアイガゴン氷河下部の格好の展望台であった。氷河越しに南から北へ6688m、聖山ネナン6870m、6552m、6374mの峰々の北西面が望まれる。さらに西側に連なる6252mと6030mの秀峰の東面が美しい。なんと印象的な景観か！ これらの

ピーカの位置は空撮写真でも確認されている。

翌日のビヨン村からの眺めも素晴らしいかった。幻想的な6260m峰の北面とネナン北面に源頭をもつ大きな氷河はアイガゴン氷河とは違った華麗さがある。10月22日モーターバイクで尼屋に戻つた。馬を使えば一週間以上はかかった行程をバイクの活用により3日で終えることができた。

2. 夢叶う——シャルグン・ラから金嶺郷 ジャンボ措（湖）へ

10月23日、尼屋から嘉黎に帰る。途中、タツエのラマ寺からミツク・ファウラーが初登頂した鋭峰カジヤチョ6447m北面の稜を仰ぎ見、嘉黎より谷から際立つた岩峰の北面を写真に收める。このピーカはブルース・ノーマンドが尼屋曲源頭の6066mであることを同定してくれた。私は2002年の秋にラチン・ラから南西面の写真を撮つているが、山のプロファイルは見る角度により想像もつかぬほど変わることを実感した。

次の目的地に移動するため翌日、那曲にてアワーンが公安に出頭したところ、なぜ5日間も尼屋に滞在し何をしてきたのかと詰問された。それ以上のお咎めはなかつたが、逐一外国人の動静をウォッチしている公安の情報

との風聞がある。辺境でも地元への利益誘導が行われている。

道路は4400～4800mの高原から3000mまで下る。初めて見るサルウイン川

(怒江) 上流部の景観に心が踊る。途中、觸體壁のある達木寺に立ち寄る。中国人でも見るのが難しいといふこの異形の壁は、チベットでも比如県のこの寺にしかないだろう。觸體壁はサルウイン川の辺に建つ達木寺の鳥葬場の一面をなしている。アワンの友人が僧侶をしてお陰で鳥葬場に入り写真を撮ることができた。カメラの持ち込みは2台に制限され、撮影料として1カット150元とられる。

アワンの才覚については少し書いたが、彼の経歴についても触れておこう。アワンはラツサ近郊の美しいヤムドム湖畔の村に生まれた。家は貧しかったので、小学校を出るとすぐ僧侶養成学校に入り、ラマ僧になる道を選んだ。しかし、6年ほど経つたところで心機一転、僧侶になることを止めてラサの英語の夜間学校に入つて勉強をする。その後、外国人の観光ガイドとなつた。

10月25日、川藏北路を辿り比如に向かう。幹線道路にもかかわらず随所で工事中のため川藏南路に比べ悪路で時間がかかる。ところが川藏南路から比如までの道路は舗装されている。チベット自治区の政府要人である比如県出身者が道路を舗装させたという。彼は4年前まではチベット自治区のトップの座にあり現在は北京に住む。パンチエンラマ11世が亡くなれば彼が12世の座を継承するだろう



シャルグン・ラからの眺め。5700～5800m峰東面。

いるので各地の観光局の役人の知り合いが多く、公安と交渉するにあたつても友達、あるいは「友達の友達」の縁を使って上手に事を運ぶ。海外へ “It would not be exaggeration to say that in fact our guide, Awang, has led the expedition to success.” と発信した。当初は今まで使つてきたガイドのタシが同行する予定だったが、家族が病気になつたため、アワンが代役として急遽来てくれたことが我々に「強運」をもたらした。比如でも公安がホテルにきて厳しくチェックされた。

10月26日の朝、張繼躍が見かけたといふ外人はブルース・ノーマンドであることが帰国してからわかった。近年開通した比如から辺境までの道路は打つて変わって悪路である。この日は5500mぐらいの山塊のシャー・ラという5030mの峠を越え、居るだけでも病氣になりそうな汚い町、白嘎で昼食をとり尼木郷で泊まる。途中で「新型インフルエンザ」のチェックがあり驚かされる。検問は随所で行われるが検疫は初めてだつた。タイヤが消毒され、全員体温を測られる。なんと新谷さんだけが36度の熱があり(他は皆35度台)、20分間の待機を命じられた。意味不明だが逆わざに従う。検疫場所からはパトカーに先導され尼木郷に着く。尼木では全

員が公安に呼び出しを受ける。町の宿泊所に泊まつてはいけない、街から出ではいけないと命じられ、その代わりに郷政府の役所内の部屋を提供してくれたが一種の軟禁である。翌日小雪の中、カレ・ラ 5 000 m を越えて辺覇に着いた。7 年前は恐しく不潔で雑然としていたが、街は大きくなり建設も一巡し小さげいになつてている。

シャルグン・ラを越えて金嶺郷に入ることができるか、辺覇の公安の出方次第である。7 年前に果たせなかつた思いが叶うだろうか。アワンが公安から戻つてきた時の表情は冴えなかつた。横柄な 4 人のチベット族の係官が我々の同行者全員を呼びつけ、ID カード、運転免許証のコピーをとり細かく調べ、疑問があるとラサの公安まで電話で問い合わせる。張繼躍にたいしては ID カードと中国登山協会の公認ガイドライセンスをもとにインターネットで彼の身分を確認する。2 日前に外国人 2 人が金嶺郷での 20 日間の滞在を申請したが却下したと言い、最初はカードが極めて固かつた。

それからアワンの本領が発揮された。何とか係官とコントラクトを繰りかえし、公安に対していつもそう話させていくように「我々は今まで幾度となく東チベットの美しい未踏峰

を内外に紹介してきた。今回の旅の目的も同じで、中国のためになると信じている。政治的な意図は全くない。できることなら公安の誰かが我々に同行してほしい」と力説してもらつた。こうして夕食時には係官の一人にレストランに来てもらうことに成功し、シャルグン・ラから金嶺郷への道筋について親切なアドバイスを受けるところまで漕ぎつけた。

その夜、アワンは彼をカラオケバーに招待し交渉を続けた。最初、係官は自分の同行については管轄である昌都の公安局にお伺いをたてると言つたが、アワンは、それはヤブ蛇になるので止めてほしいと制止したという。かくして、我々に許可を出すことと本人が同行することが同意された。

① 辺覇から金嶺までの 70 km の自動車道路は 2006 年に開通し、現在は金嶺からアランド（ア蘭多）を経てジアゴン（加貢）まで通じているが、アランドから先は洪水で頻繁に道が流される。08 年は湖が決壊して死者が出た。

② 道路は悪く天候は不安定なので、荷物を軽くし非常食を持参のこと。

③ 金嶺郷ではチベット族の家に泊まつてはならない。郷政府の施設を提供する。

④ 大雪が降ると一週間は通行不能になる。冬

の 4 カ月間は自動車の通行はできず、馬かバイクだけが通れる。

⑤ ツーリストとして金嶺郷に入る外国人は我々が初めてである（これは誤りで 2000 年に英国のチャールス・クラークが入っている。チャールスは中村の友人で脳神経科医、英國のエベレスト基金理事長などを歴任）。

「周囲のあらゆる方角に輻輳する高峰の連なりが望まれる。一際目立つてマツターホルンのような峻峰が見える。多分 18000 フィートは超えているに違いない」（Peking to Lhasa edited and compiled by Francis Younghusband）。ジョージ・ペレイラが 1922 年 9 月 25 日にシャルグン・ラに立つたときに見たパノラマの印象である。

10 月 28 日、快晴。この日はマイナス 9 ℃ まで気温が下がつた。公安係官もランドクルーザーに同乗してもらい、午前 10 時に辺覇を出発する。晚秋の色彩を失つた茶褐色の谷を、茶馬古道（北京～ラサ街道）を左手に見ながら峠に向かう。予想より遠く感じる。12 時半にシャルグン・ラ着く。

「オイラソー（神様、お陰で）に立つことができました」。

5500～5800 m の雪峰が東、南、南

西にかけて重疊と広がる。が、ここからは色浦崗日や金嶺東南の高峰群は見えない。高度計は5260mを示している。シャルグン・ラはサルウイン川とヤルン・ツアンボーの分水嶺をなす。北京～ラサ街道、Gya Lamを辿り禁断の都へ赴いた先駆者に思いをいたす。

東チベット、雲南、四川、青海で数限りない4000m以上の峰を越えてきた。未知の彼方に通じる「峠」を越える時の感慨はひとしおである。1995年秋に崗日嘎布の然烏から察隅に通じる徳母拉4800mに立った時の高揚感を思い出す。ヤングハズバンドがピークより峠にこだわり続けた気持ちがわからぬでもない。

シャルグン・ラから金嶺郷へは広い谷を下り、途中でリチエン（大きい山）5611mの均整のとれた雪峰が見える。やがてゴルジュ帶右岸の岩壁を縫つて緩やかに下り、展望が開けると金嶺郷の広い谷が現れ、南東にジョンラモボ6606mの鋭峰、その南西に6000m峰が重なつて見える。東側にも白雪の秀峰、峻峰が連なっている。夕刻、金嶺郷に着き、出張してくる役人が泊まる郷政府宿舎に落着く。

金嶺は標高3740m、郷には七つの村があり人口は全部で四千人である。「金嶺」はチ



金嶺の谷

目的地への金嶺東南の大氷河湖ジャンボ措・マライポ氷河へのトレッキングには、ここでも馬は減っているのだろう、モーターバイクの使用を勧められた。アワンが聞いてきた話だが、人民解放軍がチベットへ侵攻した年、すなわちダライラマ14世がインドへ亡命した1959年に解放軍が波密から金嶺へ行軍したときマライポ氷河の上で兵士が凍死したという。

ベット語では「ki (キ) link (リンク)」と発音し「幸福な庭園 happy garden」を意味するといふ。北京～ラサ街道 Gya Lam は金嶺～加貢～旧嘉黎を結ぶ。古き交易時代には北京～ラサ街道の中継地の要衝であった。金嶺の娘と結婚し、この地に居つき子孫を残した馬方もいた。ここの方言は独特でラサ訛りも混ざっている。ツーリストはチャールス・クラーク以外には来ていない。中国人の来訪者は北京から気象調査と地図作成のため訪れたグループだけである。

10月29日、快晴。午前10時半に金嶺を出发、途中までランドクルーザーで行き、後は3頭の馬と3台のバイクで金嶺東南のジャンボ措へ向かう。谷の右手に圧倒的に聳えるヒマラヤ襲のジョンラモボ6605mの北東面と懸垂氷河を仰ぎ見ながら進む。前方に遠くマライポ氷河の上部雪原の奥に尖峰群の連なりが見える。午後1時半にジャンボ措右岸の細く開けた牧草地4070mに着く。ジャンボ措全体を足下に俯瞰できるまたとない自然の展望台である。南東に巨大なマライポ氷河の舌端、その先に蛇行する氷河、そして左岸に6018m、6382m峰の急峻な北面が聳えている。ジャボ措の両岸は100mほどの高さの氷河が削った痕が帯状に延びている。南西にはユラゴン氷河が正面に見え、その奥にたおやかな純白の6414m峰の北岸

が見え隠れする。その西に6281m峰と思しきピークが見え、そしてヒマラヤ礫が輝くジヨンラモボ6605m東面のプロファイルに圧倒される。

ジャンボ措の湖面の西寄りに沢山の氷塊が浮かんでいる。ジャンボ措舌端が崩れ落ちて風で西に吹き寄せられている。この氷塊はグーグルの衛星写真地図にも写っている。ジャンボ措は長さ約3km幅約1kmの矩形状の大いな氷河湖であるが、わずか40年の間に形



カンリ・カルポ ca.5800m北面。



カンリ・カルポを背に帰路につく。

成されたばかりである。金嶺郷の村人によると40年前には湖ではなく、氷河は現在の湖の端まであったという。35年前の旧ソ連20万分の1の地形図にも氷河湖は描かれていない。地球温暖化による氷河の急速な後退を示すいい例だろう。

展望台からの帰路、コナI峰6378m西面の頂上部分が望見された。超望遠で捉えた

その姿は円錐形に固めた白砂糖（シュガーローフ）のようだ、南極圏の嵐吹きすさぶサ

ウスジョージア島の山を想像させる。翌日、夜明けに起きて金嶺からコナIII峰6628mとその北の6092m峰西面を写真に收める。マライポ氷河、ユラゴン氷河源頭とその南から東にかけて反対側の易貢藏布の支谷に下るいくつかの大氷河の源頭を囲繞する山群は念青唐古拉山東部の中で未踏の6000m峰が最も多く密集しているところである。

わずか一日で効率よく踏査ができたのは同行の公安係官が金嶺郷の役人に指示をしてくれたお陰だ。その役人は偶然だがアワンと同郷だったので直ぐ打ち解けてくれ、親切にトレッキングの段取りをしてくれ、展望台まで案内してくれた。ジャンボ措へのトレッキングから戻ったときの公安係官と張繼躍との会話にはまたしても驚かされた。

公安係官「嘉黎から忠玉（尼屋）に行って山の写真を撮つたそうだが、金嶺の山と氷河と比べてどうか」
張繼躍「金嶺のほうが遙かに壯麗で素晴らしい」

中国公安の情報網恐るべし、と言うべきだろ。我々は常に監視され公安に通報されていたのである。夜にはアワンが公安係官と金嶺の役人たちをカラオケバーで労つた。夜中まで宴会が続き5人でビール4ダースを空け

た。こうして金嶺の旅は「Everybody happy」で終わった。10月30日、金嶺郷から往路を辿り辺境へ戻った。

3. 崗日嘎布「幻」のコネ・カソリから波堆 蔵布の聖山・玉仁峰へ

10月31日には公安係官の勧めでコナ三山の東側の普玉谷に入り三つの小さい湖を訪れる。その後、踏査地域③に入るためにサルウイン川（怒江）を二度渡り、長駆6日間のドライブで波密に移動する。北京～ラサ街道Gya Lamがサルウイン川をわたる歴史的な橋があつた馬利ではランドクルーザー1台のラジエーターが壊れてしまい、運転手が半日かけて修理して直した。手馴れたものと感心する。

7年ぶりの昌都の発展ぶりを見るにもの興味があったので骨休めを兼ねて立ち寄ったが、ここで新谷さんがデジカメのメディアを没収されそうになつた。ホテルの裏庭で閲兵している解放軍兵士の写真を6階の部屋から撮ったところ、目ざとく気がつかれ、3人の軍人に部屋に踏み込まれた。危ないと予感がしたので、踏み込まれる直前にメディアを取り替えておいたので事なきをえた。冷や汗ものだった。

八宿から然烏への川藏公路のサルウイン川とヤルン・ツアンポーの分水嶺の峠、安久拉

4475m付近で念青唐古拉山東部東端の6042m峰東面の写真を撮れたのは一つの収穫だつた。

踏査地域③の目的は崗日嘎布西部のコネ・カソリ6347mの探査だつた。1999年秋に学習院隊が東側のゴネ氷河から偵察に入つたがこの山を見ることはできなかつた。川藏公路からは手前のデルポラ三山（西からI峰6343m、II峰6065m、III峰6140m）に遮られて見えない。2006年に私はゴネ氷河への接近を試みたが麓の村落で駄駄の調達ができず諦めた。2009年の計画は西側の谷、帕隆藏布支流の秋朗藏布をターゲットにした。この谷については、旧ソ連の地図にはトレインの記載はなく何の情報もなかつたので、波密に行く途中、松宗でアワーンにアクセスの可能性を調べさせた。結果は、秋朗藏布は谷の入り口に美しい秋朗村があり奥にも一つ村のある豊かな開けた谷で、通行は容易であることが判つた。先読みの上手なアワーンは秋朗村の村人を探してキヤラバの段取りを済ませた。

しかし、ここでも許可問題があつた。11月5日、波密に着いて早々にアワーンは公安に頭し、幹線道路から離れて秋朗藏布に入るための許可を打診する。ラサからきたチベット

族の若い女性が担当官で、なかなか首を縊に振らなかつたが、持ち前の粘りで「ほんの少し秋朗村に入るだけ」と言つて黙認してもらうことになった。最後の踏査地域④についても、同様に長居はしないことで目をつぶつてもらうことが出来た。ちなみに城隆嗣さんたちのグループは踏査地域④に入るべく波密の公安と掛け合つたが素氣無く拒絶されている。

11月6日、波密を発つて秋朗村から川藏公路に通じる帕隆藏布に架かる吊橋の袂に着くと、アワーンが段取りしておいた通り、馬と馬方が来ている。秋朗村は、谷の正面にカソリ・カルポの秀峰と懸垂氷河、鮮やかな緑の畠、山腹の紅葉、民家の赤い屋根の構図と色彩がよく調和してシャンギリラを想像させる。村人もフレンドリーである。この村付近からデルポラ三山の北面が間近に見える。また松宗の直ぐ南の聖山・バルダンラモ（女性の守護神）4930mの岩峰の西面が屹立している。松宗付近から波密にかけて念青唐古拉山東部の5500m前後のたくさんの魅力的な登攀意欲をそそる岩峰が帕隆藏布に接近して連なつておこう。旧ソ連の地図では5442mと

なっているが、東の肩から流れ下る氷河の規模、頂稜。ピラミッドの大きさ、周囲のピークとの比較において $5700 \sim 5800$ mはあろうと推定するので、私の地図にはca. 5800 mと記載した。旧ソ連地形図の山の高さは中国人民解放軍地図局作成の10万分の1図と対比すると総じて高めだが、時として相当低く示されている場合もある。

秋朗村から馬10頭、馬方7名、バイク1台のキヤラバンで出発する。広葉樹と針葉樹の混合樹林帯の比較的歩きやすく上り下りの少ない秋朗蔵布右岸のトレインを行く。眺望はほとんど利かないが、一ヵ所だけデルポラI峰 6343 m西面が姿を現す場所を過ぎ、谷が開けた河原の端にC1(3340m)を設営する。源頭にカンリ・カルポが近づいて見える。谷の反対側、北に念青唐古拉山東部の $5400 \sim 5500$ mの岩峰群の北西面が夕日に染まる。垂直の岩壁は 1000 mほどだろうか。

11月7日、寒い、朝マイナス7℃。源頭東奥の湖ユム措とユムツオ氷河の末端近くまで登り、C2を設営する予定で朝10時にC1を出発する。旧ソ連の地図ではコネ・カソリの北の $5800 \sim 6000$ m峰を源頭とする大氷河である。急登して内院に入れば、地形上コネ・カソリは見えないにしても、壯麗な氷

河と冰雪のピークの殿堂を期待できそうである。ところがハブニングが起つた。張繼躍が背中から落馬して大怪我をする。酷い痛みにほとんど歩行不能になつたので、急遽、昼にC2を設営して彼を休ませる。キヤラバンの続行はできなくなつたので、予定を変えて空身でカソリ・カルポ直下近くの 3660 m地点まで谷の左岸を登り、西から東への展望を期待する。結果は、ユムツオ氷河の下部は見えたが、コネ・カソリは現れなかつた。秋朗蔵布源頭部の左岸を相当高いところまで登れば見えるかもしれないが、今回も幻の山で終わつてしまつた。

翌日、張繼躍の容態は悪く、痛みで馬には乗れないでの、とにかく我慢してゆっくり歩いてもらつた。途中まで迎えに来てももらつたトランクターで川藏公路に出てランドクルーザーで波密に帰着した。病院でのレントゲン検査で、背側の肋骨が骨折していることが判つた。

11月9日、午前中は嘎瓦龍に出かける。波密南の嘎弄巴の源頭、東西二つのピーク(5684 mと 5631 m)を源とする氷河の末端に開けた風光明媚な湿地帯が嘎瓦龍(3800 m)である。が、今は陸の孤島・墨脱へ抜けるトンネル工事が進められており周辺は

建設工事現場となつてゐる。このトンネルは全長 1800 m、あと2年で完成し道路が繋がれば、チベット自治区内で全ての県が自動車道で結ばれることになる。波密からの道路は大改修工事が行われてゐる。

午後は樹葬場(3320 m)を見るために嘎弄巴の東側の谷、卓龍沟を車で登る。樹葬場には小さなラマ寺があり、色とりどり祈祷の旗が林立している。厳肅ではあるが異様な感じは与えない落ち着いた雰囲気で満ちている。鳥葬場のような血なまぐさい空気はない。一般的には、樹葬は鳥葬や水葬にできない幼児か 7 、 8 歳以下の子供の埋葬の方法である。チベット高原南東の林芝地区を含む森林帯で行われている習慣である。赤ん坊や小さい子供が死ぬと、遺体は竹の籠、木の箱、プラスチックの容器、毛布、ベッドカバーに收められ、森の中の樹葬場に運ばれて木に吊るされる。土地の人は樹葬にすることにより靈魂は長く生き続けると信じている。樹葬場にはいくつかの頭蓋骨が苔むした地面に転がつてたが違和感はなかつた。

11月10日、波密の公安に黙認してもらい最後の踏査地に向かう。波堆藏布の聖山玉仁峰の北面の探査と念青唐古拉山東部北側の洛隆と辺境へ抜けるルートの調査が目的であ

て北側に通じている。東側の道は昔の交易路だが自動車道はない。西側は木材搬送のための車道がかなり奥まで入っている。我々は東の車道を行つてみたが両岸の展望は利かなかつた。

村人の話では、普拿から北に向かう道は三つあるという。洛隆県へは、東の谷からアオ・ラを越える道と西の谷のル・ラを越える二つのルートがある。辺霸県へは西の谷のドン・ラを越えて通じている。いずれも馬で2日の行程である。ちなみに我々老年隊の馬のキャラバンでは村人たちの倍はみておく必要がある。

既に2回訪れている玉仁郷へは波密から約80km、勝手知った道である。途中、波密監獄を通り、囚人たちの使役を見る。玉仁の懐かしい招待所の食堂で昼食をとり、夕方、目的の普拿に着く。玉仁村から仰ぐ玉仁I峰6108mの南面には氷河は無いが、普拿から見える北面は大きな氷河が発達している。その氷河の源頭に1000mはあるか、玉仁II峰6108mの氷雪を纏つた北壁が壯観である。普拿で道は東西二つに分かれるが、いずれも5000mを超える分水嶺の峠を越え



樹葬

普拿では今回の踏査行で初めてチベット族の家に泊めてもらうことができた。新しい二階建ての立派な造りで豪華な仮間がある。主人は商人でトラックを保有しバーテー取引で商売をしている。波密からセメントなどの資材、日用品を運んできて、バターやチーズと交換して波密で売る。仮間にはダライラマ、パンチエンラマ、1991年に17歳で亡命し世界中に報道された若き僧侶の写真が飾つてある。昨今の締め付けが強くなつた状況ではダライラマの写真はあえて避けるのに、なぜこの家では飾つてあるのだろうと不審に思つてアワーンにその疑問をぶつけてみた。「一般にダライラマの写真は禁止されているが、コ

村人の話では、普拿から北に向かう道は三つあるという。洛隆県へは、東の谷からアオ・ラを越える道と西の谷のル・ラを越える二つのルートがある。辺霸県へは西の谷のドン・ラを越えて通じている。いずれも馬で2日の行程である。ちなみに我々老年隊の馬のキャラバンでは村人たちの倍はみておく必要がある。

普拿では今回の踏査行で初めてチベット族の家に泊めてもらうことができた。新しい二階建ての立派な造りで豪華な仮間がある。主人は商人でトラックを保有しバーテー取引で商売をしている。波密からセメントなどの資材、日用品を運んてきて、バターやチーズと交換して波密で売る。仮間にはダライラマ、パンチエンラマ、1991年に17歳で亡命し世界中に報道された若き僧侶の写真が飾つてある。昨今の締め付けが強くなつた状況ではダライラマの写真はあえて避けるのに、なぜこの家では飾つてあるのだろうと不審に思つてアワーンにその疑問をぶつけてみた。「一般にダライラマの写真は禁止されているが、コ

て北側に通じている。東側の道は昔の交易路だが自動車道はない。西側は木材搬送のための車道がかなり奥まで入っている。我々は東の車道を行つてみたが両岸の展望は利かなかつた。

村人の話では、普拿から北に向かう道は三つあるという。洛隆県へは、東の谷からアオ・ラを越える道と西の谷のル・ラを越える二つのルートがある。辺霸県へは西の谷のドン・ラを越えて通じている。いずれも馬で2日の行程である。ちなみに我々老年隊の馬のキャラバンでは村人たちの倍はみておく必要がある。

11月11日、念力が通じたのか、晴れてくる。玉仁峰北面の氷河、氷雪の峰と放牧場の馬の群とのコントラストが絵になる。帰途、波密の直ぐ北側に聳える秀峰デインペルナラソン6135mと異形のピーカ、グトンチャラゲボ5511mの西面をクリアーな写真に撮れたのはめつたないチャンスだった。翌朝、波密を発つて帰路についたが、波堆藏布を渡る橋の手前で今まで姿を見ることができなかつた6001m峰の南面を写真に収めることができたのも幸運であった。踏査行の締めくくりに相応しかつた。踏査の対象ではなかつたが、波密からよく見える崗日嘎布の多くのピーカを旧ソ連の地図上で同定できたのも収穫だつた。波密の市街から東の方角に見える顕著な二つのピーカは右が6045m、左の岩峰が5841mであることがわかつた。

11月12日、色季拉4500mでも好天に恵まれ、ナムチャバルワとギャラ・ペリ三山の眺望を楽しむ。「強運」は続いた。ラサに帰

ると、折しも岡日嘎布G2峰6805mの初登頂に成功してラサに戻った神戸大と武漢大学の中合同登山隊の隊長、井上達男さん他のメンバーと会うことができた。ラサ最後の夜はガイド、運転手、コック全員と美味しい鍋料理を堪能した。よき旅のフィナーレであった。

エピソード

辺境のニューリッチ 冬虫夏草

易貢藏布の尼屋に着いてキャラバンの準備をアワンに命じたとき、この土地のチベット族は金持ちになっているので、馬にしろモーターバイクにしろ高い金を払わないと動かないだろうと言われた。事実、近年、漢方薬の冬虫夏草の価格が高騰し、お陰で良質の冬虫夏草がたくさん採れる嘉黎、那曲、比如、辺霸のチベット族はにわかに豊かになった。

シーズンの6～7月の2カ月で1人が2kgほど冬虫夏草を採集する。売値は最高品質のもので1キロあたり7万元（約100万円）、中級品で3～5万元（40～70万円）、ネペール産の質の劣るものでも1万元（13～14万円）する。松茸の収入もあるが、冬虫夏草の方がはあるかに稼ぎが多い。尼屋では中型の家屋で建築費は2百万元（270万円）、ラサより高いが、借金をしな

キャラバンの費用と総経費

参考資料として、キャラバンの費用と踏査行の総経費を紹介しておこう。

1. キャラバンの単価・総費用

①尼屋曲：バイク 11台 3日間

1日 200元／台で 計 6,600元	
ガソリン代 160元／11台／片道 3,520元	
ライダー 11名 3日間	
120元／日／人 3,960元	

②金嶺郷：馬 3頭、バイク 3台、馬方・ガイド 7名、公安係官 1名（3日間）

馬：250元／日／頭 750元	
バイク：250元／日／台 750元	
馬方・ガイド：180元／日／人 1,260元	
公安係官：200元／日 600元	

③秋朗藏布：馬 10頭、馬方 7名（3日間）

馬・馬方共：140元／日／頭 7,140元	
-----------------------	--

2. 踏査行総費用 3名分

（US\$1.00=90円、1元=13.5円）

①四川大地探検有限公司への支払い額

（US\$31,857） 2,870,000円

②個人が旅行中に自分で払った人民元

（10,000元） 135,000円

③日本・成都航空運賃

合計	420,000円
1人当たり	3,425,000円
1人当たり	1,142,000円

[注記]

(1) ①は②を除き成都に着いてから成都を去るまでの全ての費用。主な費用は

▽未開放地区への許可取得費

US\$1,500／人 US\$4,500

▽ランドクルーザー 2台 US\$9,500

▽総合服務費（四川大地探検の経費、ガイド、装備、食料） US\$7,900

▽馬方・馬・バイク US\$3,700

▽宿泊費（ホテル、招待所） US\$3,200

(2) ②のうち 6,500 元はガイド、運転手、コックへのチップ。残りは土産など。

(3) 出発前・帰国後の関連費用（写真代など）は含まず。

本でも一時ブームになつたが、しばらくして話題にならなくなつた。なぜ中国で珍重されるのか、どんな薬効があるのか、訊ねてみるがよくわからない。「強精滋養」という返事しか返つてこない。価格が高騰するのは需要が多いためであるが、海外の華僑も含めて中国人に限定されているようだ。

私が初めて四川西部に来た20年前は冬虫夏草1匹1元だつたが、今は東チベットで良質のものだと60元もする。以前アジア陸上大会のとき驚異的な記録をだした中国の馬軍団が冬虫夏草を愛用しているということで、日本でも建てており、銀行に預金さえしている。建材も1個3～5元する御影石のブロックをふんだんに使つている。金嶺郷や加貢郷では村人は冬虫夏草の収入で村に自分の住まいを建てるだけでなく、ラサにセカンドハウスを持ち、冬場は暖かいラサで過ごす家族もいる。



右からメンバーの永井剛、中村保、新谷忠男

商人 vs. チベット族

ずる賢い輩がいるのは何処の国でも同じである。かつて中国産松茸がブームのころ、雲南省の松茸採りが、目方で取引される松茸に釘を仕込んで日本でも話題になつた。冬虫夏草でも同じことが3年前に起つた。辺境のカンバ商人が金嶺と加貢に冬虫夏草の買い付けに行つた。金嶺と加貢の連中（カンバとコンボとの混血が多い）は採れたての冬虫夏草に鉄の細いワイヤーを埋め込んで20%ほど目方を増やした。買い付けたカンバがラサに持ち込んだ時、初めてそのことが発覚し彼らは大損をした。

2007年にはモスレムの商人が冬虫夏草に目をつけ、今度はワイヤーではなく練つた小麦粉を注射器で注入し増量を図つた。冬虫夏草の中の芯は白いので見分けがつきにくく発覚するまで時間がかかつたが、そのため一時値段が半分に暴落した。モスレムの方が悪

本でも一時ブームになつたが、しばらくして話題にならなくなつた。なぜ中国で珍重されるのか、どんな薬効があるのか、訊ねてみるがよくわからない。「強精滋養」という返事しか返つてこない。価格が高騰るのは需要が多いためであるが、海外の華僑も含めて中国人に限定されているようだ。

知恵にかけては一枚上かもしれない。最近モスレム商人のチベットへの進出が増えていて商売を始めているのでチベット族との抗争が起つている町もあり、商店焼討ち事件も起つたという。漢民族と回教徒の両方がチベット族を蚕食している状況である。

チベット族の遊牧民も騙し合いで負けてはいない。遊牧民が作る純正のヤクのバターは良質であり、商人が買付けにきて高値で取引する。遊牧民はラサで安価なマーガリンを買ってバターに混ぜて「純正」と称して売りつける。また、寺院で使う灯明のバター容器の下にジャガイモを入れておく、などなど悪知恵を絞る輩もいるようだ。

私の現役時代

澤木 一夫（昭34年卒）

はじめに

過日、会報担当の小島さんから電話をいただいた。現役時代のこと書けという。すつかり山から遠ざかっている私にとっては、誠に荷の重い話だった。一度はお断りしたものなんと佐藤さんのご指示だという。純正な体育会系の私にとって先輩の声は天の声、引き受けざるを得なくなってしまった。

もとより上原さんの格調の高さに及ぶべくもないが、私の記憶しているエピソードなどを紹介しておくことも無駄ではないかと思い以下に書き遺しておこうと思う。一部「針葉樹12号」の記録と重複したり、一方では記述が定性的になつたりすることはお許し願いたい。また、ところどころで敬称を省略させていただいた。

入部のころ

私が大学に入りH U H A Cに入部したのは

昭和30（1955）年である。「もはや戦後ではない」と書いて有名になつた経済白書が出たのが昭和31年だから、世相はまだ雑然としていた。

就職にあたつては思想調査が結構厳しかった。なにしろ当時の企業経営者の中には社会学と社会科学の区別が出来ない方や、社会科學マックス・アカなどと短絡して考える方もいたというから無理もない。従つて、一橋大学といえども優秀な学生はともかく並み以下の学生にとって就職は結構楽なものではなかつた。

そんな中で「運動部」に入つていれば思想調査についてはかなり免責されるというような噂があった。しかし蒲柳の質の秀才に、高い運動能力を必要とする陸上部や野球部、サッカー部等は無理だった。山岳部ならまだ歩くだけだからよからうと思われたのか大勢の学生が入部した。たしか20名以上いたのではなかろうか。部会のときは旧部室に全員が入りきれず、遅れてきた者は窓越しにリーダーの話を聞いていたことを覚えている。我々の同期生は約500名だったから全学生の約4%が山岳部員になつたことになる。（注）

山岳部だつてそれなりに厳しい。4月の新人歓迎山行や、5月の谷川岳合宿、更には夏合宿で少しづつ退部者が出でていき、最終的に

市川、宇田川、大橋、景山、城戸、澤木、山田の7名が残つた。このうち、城戸と山田は残念ながら若くして病を得て早世し、現在5名が健在である。

景山は早くに高校の友人たちと共に西丹沢に農家を購入して優雅な田園生活を送っている。また、宇田川には絵心があり、年に1～2回展覧会に出品している。特技のある人は羨ましい。ただし持病があつて山から遠ざかっているのがちよつと残念だ。大橋とはしばらく会つていないが、毎年学生時代のニッケネーム「怪僧ラスプーチン」を髪飾させる力強い筆致の年賀状をもらつていてからきつと元気にしているに違いない。

一番元気なのは市川である。昭和40年代から京都に居を構え、以来京都の北山をほとんどの踏破したそうだ。冬季など観光地の鞍馬山からちよつと奥に入つただけで一日中人に会わぬコースがいくらでもあると聞いて、東京とは大違いと羨ましく思った。一度案内してもらおうと思っているのだがまだ果たせていない。更に、在米の加地さん（昭33年卒）と頻繁にコンタクトをとつてアメリカ・ロッキー山脈のトレッキングコースにしばしば行つてゐる。まだまだ十分現役時代と同レベルの活動をしている。

なお、現在の部室建設にあたつては、彼の

(注) 当時はどの大学でも同じような状況だった。

例えは早稲田では毎年70名前後もの入部希望者

があつたそうだ。それを5月の谷川岳合宿で新人

に使いもしない道具を16貫(60kg)も背負わせ、

定宿のある湯檜曾から一ノ倉沢出合まで歩かせ

ると大抵の者は脱落して、結果精銳のみ5~6名

に絞り込むという非人道的なことをやっていた。

これは早稲田に行つた私の高校の先輩から直接

聞いた話だから間違いない。

もつとも、私が卒業してまもなくの頃、その先

輩とこんな話をしたことがある。

先輩 「まつたく今どきの若者は体力がないな！

ちよつと背負わせるとすぐバテてしまうのだか

ら……」

私は「早稲田のことだから16貫も背負わせるのでしょ。そんなことをすればバテるのは当たり前ですよ」

先輩 「そうじやないよ。最近の連中は8貫(30kg)

でバテてしまうのだから」

私 「そりやちよつとまずいですね。ウチ(HUH A C)なんか積雪期には誰でも最低10貫(38kg)は背負いますからね」

先輩 「(憮然として) そうか……」

だから、当時のHUH A Cは体力面においてあの早稲田大学山岳部を十分凌駕していたことに生したものだ。



剣岳早月屋根 第一キャンプにて
左より 澤木、中島、中川、大橋

山本健一郎さんの思い出

○昭和31年春合宿(明神東陵) CL山本

最初は山本さんの思い出から始めた。山

本さんの思い出を書くにはどうしてもこの合宿から始めなければならない。

周知の通り、HUH A Cの新人事は毎年9月に決定し、11月の富士山合宿がデビューとなる。次の冬合宿は4年の前リーダーが指揮をとるから実質的には翌年の春合宿が最初の大きな合宿となるわけだ。

私は山本さんの最初の大きな合宿で大失敗をしてしまったのだ！(詳細は「針葉樹12号」) 完全に私のミスで改めて山本さんはじめこの合宿に参加した各位に深くお詫びしたい。その後しばらくの間飲み会の都度、山本さんから「お前はオレの合宿をソブシやがって！」と半ば冗談半ば本気でいわれ、毎回穴に入りたくなるような気分だった。

もつとも、先年吉田さんの葬儀の帰途、お清め会で改めてこのことをお詫びしたら「なに、新人をあのような場所で使つたのはリーダーの責任だよ」と言つていただいたが、だからといって私のミスが消えるものでもない。申し訳なく思う気持ちは今でも変わりはない。

(追記)ここまで書いてきて当時こんな話があつたことを思い出した。恥を忍んで以下になら。

追記する。

上高地帝国ホテルの冬季小屋管理人に木村殖さんという方がいた（『上高地の大将』という著書がある）。当時どの大学山岳部でも積雪期に穂高に行くものは皆入山時に木村さんのところに立ち寄り計画の概要を話し、下山時にも再び立ち寄って結果を報告するのが習慣となっていた。また、下山時にはお茶と一緒に供される野沢菜が野菜不足の身にとても美味しかったものだ。

私の高校の後輩に学習院に行っている者がいた。当時あの大学には芳賀スキーの芳賀さんなど著名人がいて、特に木村さんとは親しくしていた。

卒業していく頃だったかその後輩と会ったとき、「木村さんが澤木クン（私の高校では慶応式に上下すべてケン付けて呼び合っていた）のことを褒めていたよ！」というのだ。ある時、木村さんと雑談をしていて話題が遭難の話になつたときらしい。

木村さんは「ワシもここにいていろいろな遭難を見ているが、一番偉かつたのは一橋のヤツだな。彼は前穂の肩から岳沢の底まで落ちたのに、ここまで歩いてきた。あれは山では絶対に死んではならないという気持ちがあつたからだ。山登りをするやつはこうでなければいけないよ」と言つたそうだ。

木村さんがこう褒めたからといって私のミスがエクスキューズされるものではないが、こんな話があつたということをここに記載しておきたい。

○昭和30年夏合宿（剣沢合宿 剣ヶ檜縦走）

C L 吉田

さて、時計の針を元に戻して時代順に印象に残つた山行について書いていこう。

先ず、1年の夏合宿が懐かしい。私は高校

時代から山岳部に入つて重い荷を背負うことには慣れていた。あのころが一番強かったかもしない。8貫から9貫くらいではビクともしなかつた。吉田さんや佐薙さんから「お前は強いなあ！ ホルモンタングみたいだ」などとからかわれたものだ。本隊の合宿は剣沢だつたが、おかげで抜擢されて3年と2年だけが行つてゐる三ノ窓に行くことを許可された。

ある日の午後遅く2年の茂木さんと個人装備だけを持って三ノ窓に向つた。池の谷乗越から浮石を蹴散らして三ノ窓に着くと山本さんがひとりで夕食の準備をさせていた。

ここでちょっと脱線して合宿の食事について記載しておこう。ラーメンや週刊誌が30円の時代、食料費は私の高校では主食は別に持参して1日100円の予算だつた。

それがH U H A Cでは主食込みで1日100円なのだつた。前号で上原さんが書いておられるように米は毎度Y中さんに安く調達していただきいたし、その他味噌、醤油、マーガリン（バターに非ず）など大量に使うものは上野のアメ横で購入したが、そんなことをしても予算内で賄うのは容易なことではなかつた。いきおい毎日の献立は固定してしまつた。朝は味噌汁に佃煮とフリカケ、昼はだいたい



左より 中間テントにて
市川、倉知、宮本、澤木

い鯨の大和煮の缶詰だった。夕食は先ずジャガイモと玉ねぎを煮ることから始める。出来

上がったときカレールウを入れればカレーライス、ハヤシルウを入れればハヤシライス、小麦粉を溶いてちょっと塩で味付けをしたものを入れればシチュウで、このパターンの繰り返しだった。だから、山本さんが準備されているのを見て目を瞠つたものだ。ラジウス（石油コンロ）にコップヘルのふたを置き、油を敷いてから飯と玉ねぎのみじん切り、これに缶詰のコンビーフ（本隊合宿でこんなもの見たことなかつた。これは山本さんの私物だったのかな？）を混ぜて即席炒飯の出来上がりというわけだ。30人以上の大所帯ではこんな贅沢は許されない。私も新人の分際でこの豪華な夕食のお相伴に与させていただいた。

閑話休題。翌日は山本さんのリードで初めてチンネを登らせていただいた。それまで穂高涸沢のいくつかの一般ルート、奥多摩のつづら岩、丹沢の沢登り程度しか知らなかつた私にとって素晴らしい経験となつた。それしても三ノ窓は素晴らしいところだ。今はどうなつているだろうが、当時は我々を含めてテントは2～3張しかなかつたし、雪はテントのすぐ下まであつたから食事の水作りに事欠くことはなかつた。この別天地を1年の時に経験させていただいた先輩諸氏に

改めて感謝したい。

○昭和31年冬合宿（北岳バットレス）CL 山本

昭和31年の冬合宿は山本さんの最後の合宿だつた。私は2年になつていたが3月の大失敗にもめげることなく勇躍参加した。当時のルートは夜叉神トンネルを抜け鷲の住山からいつたん荒川に下り、荒川小屋から池山小屋に登る旧ルートだ。標高差約1000メートル、私は一番下だつたからこのルートを何回も荷揚げした。今地図を見るところの道は消えている。広河原林道が開通してルートが変わり廃道になつてしまつたのだろうか、つくづく時の流れを感じる。

そんなことはともかく、数日後ボーコン沢の頭に前進キャンプを設営して全員が入つた。私は4年（5年）のY中さんと第3尾根を登ることになつていて、無雪期にも第3尾根を登つたことはなかつたが、文献を見る限り這松交じりの急峻な尾根であり難しい岩もないようだつた。いざとなれば這松を掘り出して体力任せに登ればよいと思つていたから気は楽だつた。

ところが悪天候が続いた。行動日は午前4時出発の予定で毎日午前2時半に起床してテ

ントから首を出し天気を見るのだが、ほとんど毎日小雪がちらついていた。岩壁に取り付くルートは八本歯のコルから大権沢を下り途中から水平バンドで渡るのだが表層雪崩の虞もあり遅い時間での行動は危険だつた。4時に中止が決まつてからは再び寝袋に入り惰眠をむさぼる日が続いた（その中でたつた一日、6時に起きてみると絶好の無風快晴で唯一の行動日を逃してしまつたが）。

このよくな中、前進キャンプに入つて7日目の夜全員がCLのテントに集められた。リーダーの山本さんから「明日最終のアタックをすることとし、ダメな場合は撤収」という指示があつた。私は「いつたい何で？」と思つた。確か撤収の理由の一つとして「3000m級のところに長くいると生理的に問題が生ずるから……」と言われたからだ。「ヒマラヤの6～7000m級ならいざ知らずただか我が国の3000mのところで……」と不思議に思つた。しかしリーダーの指示は絶対！ 翌日のアタック最終日もガスのうえ小雪交じりの天候のため中止となり、ファックスタイルも放置したまま前進キャンプを撤収して下山した。

しかし今「針葉樹」を精読すると、この合宿は中途入山、中途下山者が多く山本さんは登攀メンバーの決定に苦慮されていたのだと

思う。更には冬合宿における4年か3年か

リーダーシップのあり方についても悩んでおられたことが窺える。従つて、こんなツキのない合宿は事故のないうちにやめてしまおうと思われたのではないかと推測する。

3年次の春合宿、4年次の冬合宿どちらも不本意に終わつたことに山本さんはさぞ心残りだつたに違いない。そのひとつには私にも若干の責任があることについて誠に申し訳なく思う。

甘利仁朗さんの思い出

甘利さんは私の3年先輩である。私が入部したころすでに優れたクライマーとして我が国の山岳界に認知されていた。後年、社会人山岳会の猛者に交じつて大学山岳部から只一人参加して積雪期北岳バットレス中央稜初登攀を成功させたのも甘利さんの技倅を彼等が認めていたからに違いない。

私は甘利さんと岩登りをご一緒にさせていただく機会はなかつたが、一緒に登つたことのある城戸に聞いたところでは、日頃温厚な甘利さんがひとたび岩壁に取り付くときつい指示が飛び、登攀完了まではタバコも吸わせてもらえないという厳しい一面を垣間見た、ということだつた。

岩場ではご一緒できなかつたが、甘利さん

について私には忘れられない思い出がある。

私が3年の時、9月中旬のある日部室に甘利さんがお見えになつた。その時部室には私しかいなかつた。「今年の夏合宿はどうだつたの?」と聞かれたから、私は「剣沢合宿では天気が悪く長引いてしまい、食糧が不足してしまつたので縦走の規模を縮小せざるをえませんでした」と答えた。

すると甘利さんは、「こう言われたのだ。『最近そういうのが多いね。目標を完全に達成しよう』という気概がないと、ただ漫然と合宿をやつていればいいという癖がついてしまうよ!」と。

私はびっくりしてしまつた。因みに過去3回の合宿を列記してみよう。

▽昭和31年冬合宿(北岳バットレス) CL
山本

前記のとおり

▽昭和32年春合宿(白馬杓子岳) CL 岡垣

○昭和32年冬合宿(槍ヶ岳—奥穂高岳、滝谷第3尾根) CL 岡垣

私は3年だつたからこの合宿では大体先頭で行動した。途中いろいろあつたが、12月15日滝谷A沢のコルに第2キャンプを設営し、アタック隊(奥穂高岳登頂組:城戸、渡辺、澤木、滝谷第3尾根組(4年)・T中、上原)が入り、17日それぞれアタックに向かつた。

朝晴れていたが北穂を過ぎるころからガスがかかり、やがて雪交じりとなり、穂高小屋に着いたときは風雪が強くなつていた。こからあたりで引き返さないか、という意見が出た。この時真っ先に頭に浮かんだのが前述の甘利さんの一言である。私としてはこの合宿は何としても目的を完遂したかった。まして未知のルートならともかく勝手知つたところで引き返すわけにはいかなかつた。「もう少

概略は上記のとおり

私はこれらすべての合宿に参加しており、私だけでなく参加者全員がそれぞれベストを尽くしていたのは勿論だつた。しかし何事も結果がすべて、どんな理由があろうと傍からみればそれはただの言訳に過ぎないのである。甘利さんのこの一言は私の脳裏に深く刻み込まれることとなつた。そしてその年の冬合宿を迎えた。

「だから行こう！」と30分の頑張りで奥穂高岳の頂上に立つた。先ずはホッとしたことを覚えている。帰りは慎重に歩を進め、17時ころ北穂小屋に着いた。ここでも今日ここに泊らぬいかという意見が出た。しかし、明日以降の荒天は必至であり所持している食料も少ないことからこのまま第2キャンプに降りることにした。

北穂の下りは広い雪面を下つていき途中から左に曲がつてリッジに出る。この曲がるところを間違えると北壁の上部にぶつかり二進も三進も行かなくなつてしまふ。往路の踏跡はすっかり埋まっていたのでそのことだけが気懸りだつたが、幸いルートを見つけることができた。後は注意して下るだけだつた。途中で第3尾根組に追いつかれ一緒に下つた。T中さんたちも一瞬北穂小屋に泊ろうかと思つたそうだ。しかし、我々のトレールがあつたのでこれが見えていたりしてしまおうと考え、我々を追いかけたということだった。

結果的にこれが大正解だつた。天気のほうは予想通り翌日から4日間も降りこめられることになつたのだが、そんなことより前号で上原さんが述べておられた慶応のパーティが、あの時、北穂の頂上直下に雪洞を掘つて宿泊していたのだ。彼等の名は八鍬君と平塚君と平塚



S33.12.24 池山小屋にて

左より ○○、渡辺、倉知、澤木、大橋、小林、中川、大賀、中島、大、宮本 撮影者 小峰

君といつて平塚君が城戸の高校の友人だつた。また、八鍬君は翌年奇しくも私と同じ会社に入つた。

入社後しばらくして彼とこの合宿のことが

リーダーを拝命して

○昭和33年春合宿（剣岳早月尾根）

C L 澤木

前年秋にチーフリーダーを拝命して最初の大きな合宿に剣岳を選んだ。H U H A Cで積雪期に剣岳に足跡を印していないことと、当時剣岳周辺では未知のところが多かつたのも魅力だつた。最終目標は剣岳頂上にテントを上げハツ峰登攀としていたが、諸般の事情か

は「中間キャンプではなくBCに使つただけだから、それほど大騒ぎすることではないじやないか」と強弁したが、もし北穂小屋を使つていたらボーラー・メソッドの訓練中、既存の施設を利用したということが山岳界全体に広まり大騒ぎを買つていたに違いない（慶応のパーティについては後でまた触れる）。

この合宿では残りのメンバーが（体調の悪い景山を除き）第1キャンプから北穂を往復し、更におまけとして全員が槍の穂先登頂と、出来ることはすべて行い、久方ぶり会心の合宿となつた。CLの岡垣さんは謙遜して「針葉樹12号」に「……我々はツイっていた」と書いておられるが、私は甘利さんとの一言がこの合宿を成功に押し上げたものと信じて疑はない。

ら総員 13 名中 8 名の剣岳登頂（残りの 1 隊は悪天により中途断念）に留まつた。詳細は「針葉樹 12 号」に譲るが、食料係の渡辺君が「主食の絶対量の不足は、かえすがえすも残念であつた」と書いている。このことについて補足しておこう。

雑煮の味付けが全国各地で、また各家庭で異なるように餅の形も地域によって異なつてゐる。前年北岳のときは芦安鉱泉に発注した。甲州では一片が 4 cm × 10 cm の短冊状で、これに粗い米粉がまぶしてあつた。これをそのままコツヘルに入れて雑煮を作ると 2 杯目から杯目になると汁がドロドロに重湯のようになつてどうにも食欲が進まなかつた。ところが富山地方の餅は、一つ一つが直径約 7 cm の円形で表面はスベスベと正にモチ肌そのもの、見た目も美しく大いに食欲をそそられるものだつた。事実雑煮にするといつまでも汁が濁らず、全員「うまい、うまい！」といつて大いに食が進んだ。そのため当初の計画以上に在庫量が減つていつた。あまりの減少に途中から数量を制限した。しかし、大食漢の連中から「メシくらいちやんと食わせろよ！」とクレームがつけられ、食べさせないわけにもいかず、結局「持参した食料を食べ尽くすまで」合宿を頑張つたことで満足しなければならない結果となつた。

もうひとつ砂糖の不足がある。合宿出発の際、上野駅でどなたからだつたか大量の酒粕を差し入れていただき（モノをいただいておきながらお名前を失念してしまいました。申し訳ありません）。酒粕は甘酒の素である。寒いときは身体が温まる誠に時宜を得た差し入れ品だつた。特に砂糖を沢山入れれば入れほど味は濃くなり一層美味しくなる。バンバ島の BC ではそこら辺の甘味屋では食べられない濃密な甘酒を毎晩賞味した。この結果砂糖は見る見る減つていつた。まあ、砂糖だからこれにより合宿のスケジュールに影響が出ることはなかつたが、合宿の後半になると食後の紅茶に砂糖は完全に使えなくなつていた。

○昭和 33 年夏合宿（涸沢合宿 槍—剣縦走） C L 澤木

とにかく雨に祟られた合宿だつた。少しでも合宿の実を上げようと途中で食料や灯油を補充して期間を延長し、涸沢に 14 日間も滞在して頑張つてみたが、中途下山者に頼んで登攀用具を下ろしてから天候が回復するなど、

ちぐはぐな面も生じたことは残念だつた。縦走に入つてからは天気が回復したが、食料がなくなり剣岳を放棄して立山から称名滝道経由下山した。結局 25 日間という近来にない長

期の合宿になつてしまつたが、概ね当初の計画は遂行した。この合宿の結果は甘利さんには報告しなかつたが、もし報告していれば褒めていただけたのではないかと思う。

○昭和 33 年冬合宿（南ア 塙見岳—北岳） C L 澤木

私の最後の合宿となつた。「針葉樹 12 号」に記載したことと重複するが、この合宿の参加者が 4 年 3 名、（次代を担う）3 年 2 名、2 年 5 名、1 年 2 名という陣容では出来ることは限られていた。そのため将来の飛躍のために積雪期の山をひとりでも多く体験させることと体力づくりを目的として南アルプス縦走を選んだのだつた。

合宿 자체は特記すべきことはない。全員で塩見岳から北岳までを縦走し、池山吊尾根を下り定宿の芦安鉱泉に宿泊して新聞を見てびっくりした。社会面が大学山岳部の遭難記事で埋め尽くされているのだ。おそらく十数校はあつたろう。ちょっと名のある大学山岳部はほとんどやつていた。その中に慶應大学も含まれていた。

慶應は八鍬君がリーダーとなり、前年と同じく笠ヶ岳—槍—奥穂をボーラーでやつていた。その時、南岳頂上直下に設営したテントが雪崩に遭遇し、平塚君が亡くなつたの

だった。新聞などによると、設営した場所は南岳頂上から丁度急斜面を下りきつたあたりのようだつた。私にはどうしてあの場所にテントを張つたか理解できない。前年の我々のようすに南岳からキレットへ向かう大プラトーの真中にでも張れば、たとえ降雪で埋まることはあつても雪崩に遭うことはなかつたろうに！

平塚君には妹さんがいた。事故後、妹さんが槍沢小屋のあたりまで登つてきて下から遭難現場を見上げ、亡兄を偲んだことを女性週刊誌が競つて縷々書き連ね、読者の涙を誘つた。それから数年後、城戸の紹介で平塚君の妹さんは大橋夫人となつた。結婚式には新婦側から八鍬君たち慶応勢が、新郎側から城戸や私などが招かれて出席した。披露宴で我々H U H A C勢は恒例により新郎も交えて「讃山賦」を合唱したのだつた。

リーダーを終えて

リーダーとしての1年間が経過した。この1年間どうやら大過なく務めを果たすことができた。前年私がリーダーになつたとき母親から「お前はどうなつても、人様には何事もないよう！」と厳命されていたが、辛うじて親のいいつけを守ることは出来た。だからといって私のマネジメントがよかつたからな

どというつもりは毛頭ない。只々運がよかつただけなのだ。

例えば、リーダーになつて最初の11月の富士山合宿では、8合目付近の雪田でピツケルの制動訓練をやつていたら某君が止まらなくなつてしまつた。あと十数メートルでモレン。その時下にいた私は横つ飛びに飛びついで彼を抱きかかえ、どうにか制止することができた。あのまま落ちていれば死亡事故にはならなくとも手足を何本か骨折していたに違いない。その際ピツケルの石突を突き刺してできた左の掌の傷あとを見るたびその時のことを思い出す。

また、翌年3月の春合宿の時バンバ島手前のゾロメキ発電所の取水池に某君がスキーをつけたまま落下した。すぐにザイルを投げ、これに掴まらせ引き上げ事なきを得たが、3月中旬とはいえよく心臓発作を起こさなかつたものだし、また溺死しなかつたものだ。更に、これが左の取水池側だつたからよかつたのだ。もし右の水圧鉄管側だつたら完全に死亡事故となつていた。

大雨に祟られた夏合宿では、ある日滝谷に行つた某君がズボンを50cmも引き裂いてテントに帰つてきた。この時は学年次と登攀ルートの組み合わせをどう決めるべきか大いに考えさせられたものだ。また、縦走に入つ

てからはいくら横尾橋、本谷橋流出の噂があつたとはいえ30kg以上の荷を背負つてキレットを越えるのはどう見ても無理があつた。誰も滑落せずに済んだのは正に僕等の一語に尽きる。

このようにひとつ間違えれば大事故につながつたものを、幸い幸運の女神は私に微笑んでくれた。

あとがき

以上が私の現役時代のあらましである。山行とその資金調達（アルバイト）に明け暮れた4年間だった。今ここまで書いてきて精一杯やつてきてこの程度かと思うと虚しい気がしないでもない。しかし、このささやかな記録が90年に及ぶH U H A Cの歴史を繋ぐ環の一つになるとするならば、私の喜びはこれに勝るものはない。

追悼 山崎 擴氏

山崎さん、80代のロマン

佐羅 恭（昭31年卒）



山崎擴氏

山崎さんと私の年齢差は7歳、現役部員時代にも、卒業後もかなりの間ご一緒にした山行はなかった。おぼろげながらの記憶では初めてお顔を拝見した山行は1979年10月の懇親山行「巻機山」だったと思う。それ以後、たまたま懇親山行でお目にかかるつてはいたがお互いに密度の濃い山行が始まつたのは2001年2月のニュージーランドのトレッキング以降だつた。それから数えて20回を超える山行をご一緒させていただいた。故山本健一郎兄が02年に発足させた三月会でも初回以来毎月の常連メンバーだつた。

山崎さんはあのお人柄だから、日頃の会話ではあまりご自分の過去の個々の山行そのものを自慢げに話されることはないと生のを自慢げに話されることはないと生のを

山行歴は優に千回を超えていたことは間違いない。ご自身で書かれた文章を引用すると「これまでの登行でどれだけの高度を上がつたのだろうか。恐らく数十万メートルはあるう。宇宙ステーションにも達しようか。随分とむだなことをしてきたものだ。」（会報106号）と書かれているのだ。そしてその中の相当数の山行が横浜のお住まいから遠くない丹沢山塊だつたようだし、最後までこの山域に強い愛着と関心をお持ちだつた。その表れが今年の目標として山崎さんが計画されていたプランだと思つう。

その目標は針葉樹会総務幹事宛の新年会の通信欄に次のように書かれている。（遠・高はだんだんきつくなるばかりなので、今年の目

標は「相模川河口から水源まで」を歩くこととしました。）

地図を見るまでもなく、この計画はまさに長年愛着をお持ちの丹沢山塊の東から北、そして西の縁をぐるりと歩くということなのだ。この目標を立てられるまでには何か伏流のようなものがあつたと私は感じている。

山崎さんは数年前、横浜から茅ヶ崎に引越しをされた。その後から、80代にして依然として向学心旺盛な山崎さんは隣町の平塚市博物館が主催している「岩石・地質・考古学」

の研究グループに新人として、いわば「兵卒」のような形で参加されたのだ。その結果、私

にとって山の樹木や花、山にまつわる歴史や民話などの先生だった山崎さんから、それまでは少なかつた地学的なお話を伺う機会が新たに増え、私自身のその方面への好奇心も刺激されたのだった。

そんな伏線があつて、その研究グループでもきつと話題にされたに違いない「南の海からきた丹沢」という、長年愛された丹沢にかかる地学ブレークトテクトニクス上の定説をご自分流に歩いて確認されようとしたのが、今年の山崎さんの目標だつたと私は推察している。そして次の目標はきっとその丹沢山塊の残された南の縁から中心部へと歩く「酒匂川の河口から水源まで」だつたに違いない。



1960 年代、涸沢にて。



不明。左端が山崎氏。



2001 年、ミルフォード・トラックにて。
左から 佐薙、石井、山崎、高崎、上原。

「山崎さん 今日もまた小さな荷物ですね、一度ザックの中身を見せていただけませんか」「君、これは企業秘密だよ」「山崎さん、予科入学の時は総代だったのに、山のせいで一年後には進級が危なかつたって本当ですか?」「それはねえ……」「山崎さん達があの松高の人達にスキーを教えたっていうのは本

これが「本人の言われる「むだ」の続きなんか、私の目には 80 代にしてなお夢多くロマンを追い続けられた格好の良さに見えるのが。

奥様のお話では相模川遡行もかなり進捗していく、事故に遭われたのは 6 回目のことだつたという。このところ富士山学徒になつた私としては富士山溶岩流の末端、猿橋辺りから源流山中湖まで、丹沢、御坂そして富士山麓が交錯しているあの地域をお伴し、いざれ遠からず私にもやつてくる 80 代のロマン追求のあり方の予習をさせていただくつもりだつた。また事故がなければ出席された筈の 7 月の三月会では、8 月下旬に予定していた北アルプス白馬岳北方の山上湖めぐりのプランのご相談をすることになつていた。お元気だつたあの体力からすれば、まだまだ何年か先まで数多くの山行のお供が出来たのにと思うと何とも残念だ。

当ですか?」「うん、だけど……」こんな会話はもう繰り返せない。そして山崎さんは会報89号「戦争で部室を閉じたころ」、111号「むかし話 終戦までⅡ」など山岳部の最も厳しい時代の貴重な語り部だったが、それ以降、現在までの「自分の山行の記録全貌なども是非我々後輩への指針として残して頂きたかった。

ここ10年、私にとつてよき師匠であり、兄貴のような存在だった先輩をあいう形で失つて心の中に大きな空洞が出来てしまつた。心から山崎さんの「冥福をお祈りします。合掌

たつて登った山や経験談を披露してくださいり、また珍しい山やルート（大山北尾根など）の山行を計画してくれた。一緒に登った山は、懇親山行を除けば数少ないが、その中で白山登山は強く印象に残っている。

2003年9月7日（日）羽田空港で落ち合つて、ANA751便に搭乗し、1時間後に小松空港に降り立つた。目指す山は白山で、メンバーは、山崎さん、春日井さん、遠藤さん、三井の4名で、その年の7月の三月会で白山登山を三井が提案し、当初は遠藤さんのみであったが、その後、山崎さん、春日井さんが賛同してくれたので4名となつた。

空港でレンタカーを借りて、遠藤さんの運転で白山登山口の別当出合に向かつた。小松空港を10時に出発したのに、道に迷つたりして、別当出合に着いたのは、2時間半後の12時30分であった。別当出合発が13時。トップはなんと山崎さんである。誰が指名したわけでもなく、山崎さんが自ら歩き出した。谷に下り吊り橋を渡ると急登になる。山崎さんは白山は2回目の登山とのことであるが、しっかりととしたステップで、息もきらせずに登つていく。9月になつたとはいえ、残暑が厳しく、たちまち汗が滴り落ちる。

中飯場着13時20分。甚の助避難小屋着が

15時45分。雨でえぐれた急坂を快調なピッチで登ってきた。ここでトップは春日井さんとなり、山腹をトラバースするような傾斜が緩くなつた南竜道を延々と歩いていく。南竜ヶ馬場を過ぎ、今日の宿泊地である南竜山荘に着いたのは、ジャスト17時であった。白山は花の百名山もあり、白山の名前が付けられた花が多くあって期待していたが、今日登つた砂防新道および南竜道はコバイケイソウ以外殆ど花を見かけなかつたのは意外であつた。もつとも登るのに一生懸命で花を鑑賞する余裕がなかつたのかもしれない。

南竜山荘の食事はあまり記憶がない。とうことはあまり美味くはなかつたのだろう。しかし他の客が少なかつたので、食後、ビール、酒などで話が弾んだ。話はお互いの経験の差や趣味が違うのであちこち飛んだが、山崎さんの昔話や、動植物に関する話はみんな聞き惚れていた。結局二段ベットの下に潜り込んで就寝したのは、20時であった。

9月8日（月）5時15分南竜山荘を出発。朝食はお握りである。とんび岩コースを登り室堂を目指す。今日は雨は降っていないものの天気は良くない。ガスがかかつて山が見えない。室堂に着いたのは7時である。室堂は山小屋というよりもホールのような巨大な施

私が山崎さんと知り合つたのは、三月会（当時は一本会）の席上であった。私が神戸から帰京して三月会の存在を知り、飛び入りで参加したのが2001年の秋である。山崎さんは石井さんとともに、長老として長年にわ

山崎さんと登つた白山

三井 博（昭37年卒）

設で、子供も含め大勢の登山者が右往左往してけたたましい。気をつけないと迷子になりそうである。山崎さんが、こんなところは早く出ようよと言うので、お握りを食べて早々に出発した。本日もトップは春日井さんで、山崎さん、遠藤さん、三井と続き、頂上を目指す。

特に難しいところなどなく頂上の御前峰（2702m）に着いたのは、8時40分。白山比咩神社の奥宮が鎮座しており、神社に興味をもつ遠藤さんは盛んに写真を撮影していた。霧雨がまとわりついてとにかく寒い。まわりは何も見えないので、早々に下山することにしたが、山崎さんは誰かが忘れていった立派なストックを見つけ、先に室堂まで下り、室堂の管理事務所に届けることになった。山崎さんは元来た道を下り、春日井さん以下3名は池めぐりコースをとり、油ヶ池、紺屋池、翠ヶ池、千蛇ヶ池とまわって室堂に帰ってきた。途中にお花畑があり、ハクサンコザクラなどの高山植物が多数咲いていた。

室堂で山崎さんと再会し、10時30分出発。

下りはエコーライン経由で南竜道に合流した。下りは早い。南竜道分岐から砂防新道に入り、甚の助避難小屋、中飯場を経て出発点の別当出合に到着したのは、14時30分であつた。別当出合の標高は1260mである

から、標高差は約1400mとなり、5時間半で駆け下りてきたことになる。山崎さんは当時78歳（大正14年生まれ）と高齢であつたが、疲れた様子もなく例の如く涼しい顔をしていた。敬服の至りである。

ホテルに荷物を置いて、白山市三の宮町にある白山比咩神社總本山の見学を行つた。山

崎さんは神社の故事來歴に関心が深く、施設の構造や説明文など時間をかけて見学していた。白山比咩神社の詳細は、諸兄姉ご存じと思われる所以省略するが、白山比咩の神、イザナギの神、イザナミの神の三神を祀る全国白山神社二千社の總本山である。本日、白山頂上の御前峰に鎮座する奥宮を拝み、下において本山を拝んだわけである。山崎さんは疲れていただろうに熱心に見て回り、その熱心さには皆感服していた。

9月9日（火）山崎さんは一人で鉄道で帰るというので、朝、北陸鉄道三宮駅に車でお送りした。あとの3人は越前大野に行き、大野城を見学したり、美味しい蕎麦を食べたりして、すっかり観光を楽しみ、夕方空路羽田に戻つた。

山崎さんは、不慮の事故で亡くなつたが、温厚な人柄と博識で我々に深い感銘を与えてくれた。いつまでも我々の心の中に生き続け

ている。ご冥福をお祈りいたします。

山崎さんの思い出

蛭川 隆夫（昭39年卒）

山崎擴さんを初めて間近にしたのは、2002年9月の一木会（後の三月会）。山本健一郎さんに言われてこのサロンにデビューしたときだつた。年齢で16歳ほども離れている大先輩とて、当時はただただ黙つて末席から仰ぎ見ただけだつた。翌2003年の12月、親しく山行を共にできる機会がやつてきた。佐薙さんが石井・山崎・春日井さんと篠井山＆三石山に出かける計画があることを聞きつけ、私はマイカー提供と運転役を申し出たのである。同じ年の5月に腰痛を患い、林道を車で行けるだけ行つて徒步の時間と負荷を最小にする「リハビリ山梨百名山登山」を実践していた私にとって、頗つてもない企画であつた（手元の山行ファイルに「第8回リハビリ登山」とある）。山麓の十枚莊では、入浴順序、食卓での座る位置、布団を敷く位置な

どすべてに最後と末席とを心がけるという緊張感があった。

山崎さんは、三石山の頂上で、立派な銀板カメラのシャッターを富士山に向けて切つて、「これで年賀状用のいい写真が撮れた」と満足そうだった。このとき思い切って押しかけ年賀状をこちらから出していれば、あるいは富士山を入れた年賀状を頂戴できたかもしれない。そうすればまたとない形見の品となつたはずだと、今になつて悔やんでいる。

三石山は、登山口までタクシーも拒否する長い悪路、狭路なので、おそらく山崎さんにとつて初めての山だったと思う。しかし、その後ご一緒に他の山では、「ここは何回目ですか」と尋ねると、いつものにこやかな表情で「×回目だよ」とお答えになり、そのたびにこちらは脱帽した。

例外は、2005年12月の浜石岳（同行メンバー・石井・山崎・山本・佐薙・有賀・本間さん）。山崎さんの方から「ここは初めてだよ」と言つてこられて、幹事として「やつた！」と思つた。この山行ではまたまた十枚荘に泊まつたが、このときは諸先輩の闊達な会話に少しは加われるようになつていた。翌日の十枚岳で、山崎さんは国境稜線までの難路の急登を平気でこなされて、私は舌を巻いた。例によつて聞くと「2回目だから今日は頂上はやめとくよ」と言つて、我々が頂上を往復する間、石井さんと共に初冬の陽だまり昼食を楽しんでいた。

もう一つの例外は、2004年12月の奥多摩の浅間尾根（同行メンバー・石井・山崎・佐薙・山本・高橋さん）。これは、佐薙さんと山本健一郎さんが世話をとつた、石井さんと山崎さんの傘寿の祝賀山行だった。山崎さんは、「この尾根は完全踏破していないんだよ」と歩きながら言つた。



浜石岳にて。
前列左から
山本、石井、山崎、佐薙
後列左から
蛭川、本間、有賀。

したかったが、博学の大先輩と論争してもとてもかなわないで黙っていた。

地学の話に戻って、今年の夏の北アルプス追悼登山。メンバーは、この山行を企画した

佐薙さんと府立一中卒の山崎さんの後輩の三森さん。風吹山荘では小屋番を含めて糸魚川静岡構造線の話で酒宴が盛り上がり、また下山口は日本三大崩落の一つ、稗田山崩れを俯瞰する場所だった。それらが山崎さんを偲ぶ気持ちをさらに高めてくれた。

師走に入つて、本間さん、中村（雅）さんと一緒に、山崎さんの山岳蔵書を寄付する目的で南アルプス芦安山岳館を訪問した。ご遺族から蔵書整理を依頼されていた本間さんが、同館での蔵書の有効活用を図りたいと方針を決めたからだ。翌日、昨年のアダージオ懇親山行で山崎さんが登られた霧訪山を目指した。またない晴天の中、360度の山岳展望を満喫できた。下山して、山崎さんがお好きだったという山麓の銘酒「夜明け前」を一本買い求めた。

山にまつわる該博な知識を有しておられた山崎さん。それらをまだまだ披瀝して頂きたかったと思います。それが叶わぬことが残念でなりません。合掌

追悼 山崎さん

本間 浩（昭40年卒）

山崎さんは年次が23年と40年卒と離れているものですから、山をご一緒したのもここ5、6年のことではないかと思います。その間10回くらいお供したでしようか。高齢登山

山とはこう登るものか、自分もいづれはと思いながら歩きましたので、まさに「お供」がピッタリだったような気がします。その中から2、3ご紹介して、追悼したいと思います。

今年3月、針葉樹会懇親山行で丹沢・三の塔へ登りました。私は山行幹事だったものですから、三月会で山崎さんにプランを説明し参加をお誘いしたところ、「大丈夫かな登れるかな」と心配されているのですから、下りはちょっと長いが登りは短いこと、時間はたっぷりあることをお話しして参加をいたときました。

後日うかがったところ朝遅れたので後を追わず鶴ヶ鳥屋で皆を迎えると山頂でしばらく待たれた由、我々は手前で下ったので会えなかつたのですが。このような時に後を追わずに逆に登つて来るのを待つという判断に驚きました。山崎さんが一人で登り下つた鶴ヶ鳥屋に行きたいと思いました。

一年後、機会があつて天下茶屋（清八山）本社ケ丸（鶴ヶ鳥屋）に行って来ました。鶴ヶ

懇親山行は石井さん山崎さんの両長老の参加が目玉で、今回石井さんが不参加だったも

のですから山崎さんの参加にホッとしました。当日は天気も良く頂上ではパラグライダーを見ながら昼食と、満足のいく山行でした。三の塔尾根の下りも快調で、途中山崎さん他数人は車道を我々は山道を、若手組としては負けるわけにいかずスピードを上げたつもりですが結局追いつけず、大倉の蕎麦屋でひらいた反省会では「山崎さんは元気だな」という声がしきりでした。好天と好酒に恵まれた懇親山行でしたが、これが山崎さんのみんなとの最後の山行ではなかつたかと思いま

鳥屋の山頂は広々とはしていますが木に囲まれ見晴らしも悪く長居したくなるような所でもなく早々に下山にかかりました。急な下りもあり、ここを山崎さんは登ったのかと思いながら笛子駅に降りたこともありました。

山崎さんにシゴカレタことがありました。

佐羅さんの企画で両長老と3000mの塩見岳に登ろうということになり、そのトレーニングとして大山に登ることになりました。リーダーは大山通の山崎さんで、蓑毛からスタートし、ヤビツ峠～イタツミ尾根～大山とソコソコ汗をかきながら山頂で大休止し、下社に下りました。岩の多いイヤな下りで少し膝にもきているし、ここまで来るとお酒が頭に浮かんできます。が、「追分まで歩こう」ということに。男坂は階段続きなので山道らしい女坂ではと申し上げたところ、リーダーの一言「男は男坂だよ」。特に最後の下りは急で着いた時には汗ビツショリでした。そのぶんビールが美味かつたのですが。

これ以外にも十枚山、八ヶ岳の権現山、岩殿山が思い出されます。最近はご自分の体力を考えられ、高い山から少しづつ高度を下げておられたように見受けられました。それだけ慎重な方だけに今回の事故は残念でなりません。ご冥福をお祈りいたします。

父の遭難

山崎 貫

二〇〇九年八月一四日（金）、神奈川県警津久井警察署員の立会いのもと、死亡現場を確認いたしました。遅ればせながら、死去前後の状況についてご報告申し上げます。

七月二〇日早朝、父はハイキング風の軽装で平塚市内の自宅を出ました。その際、「遅くても午後四時までには戻る」と言い残したものの、不注意にも家族に行き先を告げませんでした。同日夕方の帰宅予定時刻になつても戻らず、本人からの連絡もなく、家族が警察に連絡しました。

二二日には警察による津久井湖一帯での大規模な捜索が行われましたが、結果は得られませんでした。

二三日午前九時過ぎ、相模川と道志川の合流点にボートで釣りに来た人が、うつ伏せに浮いている遺体を発見しました。津久井警察署が収容し、父と考えられる遺体を発見した由、一〇時過ぎに家族に連絡がありました。同日昼過ぎに家族が津久井署に赴き、遺体と遺留品を確認、同日午後司法解剖に付しました。解剖に当たった医師によれば、溺死とのことでした。ただし肺にコップ一杯程度の水が入つただけで、水に落ちたときほぼ瞬時に意識を失い、苦しみはほとんどなかつたであ

模川を、河口から水源である山中湖まで歩いて遡行する（むろんいくつもの区間に分け、鉄道やバスも利用しながら）計画を立て、実行しつつありました。七月一二日、最後に父と会つた際には、次回は相模川とその支流である道志川との合流点まで到達する予定であると語っておりました。その時の話とそれ以後の行程について父が残した記録とから、二〇日は津久井湖沿いを歩いたものと推測しました。実際、JR橋本駅の防犯カメラに、二〇日午前八時過ぎに改札口を出る父の映像が記録されておりました。それからあとの足どりは判然としません。

第3回目のスタートは最悪だった。昭和橋から右岸上流への511線は破れた土手の上、歩道は巾40cmほど、しかも片側だけ。シンフが耳をかざめて通る。2kmほどといって土手下に道らしいもの(町並の魚釣場らしい)を見つけ、降り立ったときは今ぐろいを感じてた。高田橋まで乗船。橋から左岸の田名へ。水郷もみたいと思つたのだが新しい住宅が一杯でその隣間に水路や田んぼがあるだけ。あれこれ科学館へ。奥の屋敷のみ。受付嬢に相模川の水源をたずねるも不明、約束通り電話で知らせる。あり、山中湖のこと。行程が半日伸びること、存づた。地図を読むのが先、川岸のゴロタ道へはつりこみ結局戻ることで一時間の損。朝から右腰にや、痛みあり。最後の城山登山をあきらめ、橋本行のバスに乗る。

山崎氏の山行メモ。



高田橋上から、鮎釣り。

山崎撮影。

2009年6月20日

ろう、との説明でした。遺体確認の際も、表情はまことに穏やかでした。死後長時間が経過しているため、死亡推定時刻は「七月二〇日頃」という大まかなものとならざるをえません。ただ、遺留品の日帰り用ザックに、二〇日早朝に買ったと思われるおにぎりのパックが手つかずのまま入っており、先に記した橋本駅への到着時刻からしても、同日の昼飯時より前に死去したものと思われます。

この二三日朝に、針葉樹会の皆様が津久井署まで訪ねてくださったことで、重ねてお礼申し上げます。

翌二四日茶毘に付し、二五日横浜市内の緑園キリスト教会で葬儀を行いました。九月一二日、同教会で納骨式をすませました。

遺族と警察それぞれの都合もあり、八月一四日によくやく死亡現場を訪れることができました。

相模川と道志川の合流点は、津久井湖(ダムのバックウォーター)の最上部でもあるのですが、相模川本流には沼本ダムという、小規模ながら印象的な形の取水用ダムがかかつています。本流右岸には、沼本という字からダムまでコンクリートの護岸が続いています。人が通れるだけの幅はありますが、いわばゴーロ状で、つまずきやすく、滑りやすく、

注意して歩かなければならぬ危険な場所です。同行した津久井署員によれば、いつたん川面（というより湖面）に落ちれば、身の丈を没する水深があるとのことでした。遺体が発見されたのは、ダムよりやや下流、まさに道志川との合流点でした。本流の水勢によつて流されたものと考えられ、過去にも同様の事故があつたとのことです。

父が自宅から携えた品々のうち、デジタルカメラのみが見つかっていません。これは想像になりますが、写真を撮ろうと身構えていた時にバランスを崩して転落し、カメラは水底に没したのではないかと思われます。カメラが残つていれば、死の直前までの行程が明らかになるのですが、惜しんでもいたしかたありません。

父の登山歴のうち、針葉樹会の皆様にはあまり知られていないと思われる時期について、付記したいと思います。いきおい私自身への言及が多くなつてしまふことをどうかお許しください。

私は一九五三年に故人（一九二五年生まれ）の長男として生まれました。

父は大学を卒業したあと、一九六〇年代前半まで、およそ二〇年間、山に登ることをほとんど断念していたのではないかと思いま

す。六〇年代前半、当時勤めていた会社の社長さんのお伴で穂高に登った時の写真が数葉残っています。家に帰つてから、上高地で買つたとおぼしきグラスで、水割りを飲んで悦に入つてゐる姿を覚えています。

私が小学生のころは、大山や箱根の金時山など、横浜に住む者にとってはハイキングの定番とも言うべき場所に時おり連れていかれました。たしか一九六六年の元旦は、奥多摩の御岳から大岳への縦走路で迎えたと思います。

中学生のころは、丹沢の沢登りにも行きました。渋沢で電車を降りると、駅前のよろず屋の店頭にわらじがぶら下がつてゐるという

時代でした。葛葉川本谷、勘七沢、水無川本谷とその支流、寄川水棚沢、小川谷廊下など、入門者向けの沢からけつこう難しい沢までトレースしています。困難な滝は高捲きました。ただ、父にロープで確保してもらつたという記憶がありません。時おり細引の「お助け紐」を出してもらった程度でした。いま思えば、ロープワークに自信がなかつたのではないでしようか。

高い山に初めて登つたのは、一九六七年の夏と記憶しています。その年に竣工した木曾駒ヶ岳のロープウェーを使って千畳敷カールまで行き、駒ヶ岳山頂付近の小屋（どの小屋

だつたかどうしても思い出せません）に泊まり、翌日上松に降りました。私にとっては初の、父にとつても久しぶりの三千メートル級のピークへの登山でした。父の魂胆は、久しぶりでも、ロープウェーで高度を稼いでしまえば降りは少々長くても何とかなる、ということだつたのでしょうか。実際は、やりつけない長い下降でへとへとになつたようで、その日のうちに帰宅する予定を果たせず、上松近くの鉱泉に宿泊することになりました。まだ木曾谷からの信仰登山がからうじて生き残つてゐる時代で、いまは無人小屋になつてしまつてゐる金懸小屋が大賑わいだつたことを記憶しています。

翌六八年夏は、米国から帰られたばかりの石井左右平さん、そのご子息と計四人で、北アルプスに出かけました。第一日目は、有峰から太郎平を経て、薬師沢小屋泊まり。二日目は、いきなり急登して、雲の平に到り、鷲羽岳を経て、三俣蓮華小屋泊まり。石井さんは、銀座生まれの銀座育ちで、洒脱な方です。小屋で、持参された舶來のウイスキーをちびちびやりながら、「おつな味でげす」などとおつしやつていたのを覚えています。三日目は、伊藤新道（これもいまは通過不能でしょう）を経て湯俣から大町までの行程。森林軌道の上を延々と歩くのにはまいりました。石



2004年7月、鳥海山にて。
左から 石和田、春日井、山崎、高崎、石井、佐薙。

井さんもそうとう応えていたようです。
六九年は、父と二人で穂高に登りました。上高地から岳沢を経て、天狗のコルまで行き、いまは跡形もなくなっているでしょうが、コルにあった避難小屋に泊りました。岳沢ヒュッテ（これもご承知のように雪崩にやられ、いまはありません）では、「きれいな避難小屋ですよ」と言われたのですが、実のところ

奥穂～西穂間を縦走する人々が体裁よく（？）ごみを捨てる箱と化しており、入口の扉も外していました。一面のごみの上にその戸板を載せ、二人して身を寄せ合って眠りました。翌日北穂まで縦走して涸沢に降り、横尾で一泊、翌々日帰宅という行程でした。

その年の秋のお彼岸には、八ヶ岳に行きましたが、店がありません。八ヶ岳山麓ではヤスデが大量に発生しており、美し森まで、登山靴の底がぬるぬるするほど、ヤスデを踏んで歩かざるをえませんでした。真教寺尾根の見通しの効かない樹林帯から急峻な岩場を抜け、赤岳山頂にたどり着き、その夜は赤岳石室に泊まりました。いま天望荘のあるあたりです。水の乏しい小屋で、翌朝、硫黄岳石室でお茶を飲ましてもらうまで、ほとんど水分をとれませんでした。もし八ヶ岳を初めて登る方がいらっしゃれば、佐久側からではなく、諫訪側から入ることをお薦めします。

一九七〇年代、私は高校から関西の大学へ進み、やがて社会人となり、父と山に登る機会もだんだん少なくなりました。それでも帰省した折などに誘われることがありました。沢でいえば、雲取山の小雲取谷、八ヶ岳の立場川本流、黒部源流の赤木沢、奥秩父の笛吹

川ヌク沢左俣、上州武尊の川場谷などに同行した記録が残っています。

父にとつては、まだ壮年期というべき年代で、さかんに山に出かけておりました。ただ、仕事で忙しい時期でもあり、単独行（という語は大きさかもしれないが）が増えたよう

です。ほとんど毎週末大山に通い、茶店の人と顔なじみになった、と微苦笑しながら語っていたこともあります。かと思えば、4WDを駆つて、一人で上越や東北の山に出かけ、車中で仮眠をとることも間々あつたようです。飯豊・朝日・大雪など、東北・北海道の最も本格的な山域での記録も残しています。とはいえ、基本は低山歩きが趣味で、道志川流域の丹沢西部・北部や道志山塊は、父にとつてホームグラウンドとも言うべきところでした。道志という地名には人一倍愛着があつたようです。

老いてからは、針葉樹会の皆様といつしょに山や屋外に出かける、あるいは集まりに参加することを無上の楽しみにしておりました。ただ、一人で歩くのが基本、という信条のようなものは持っていたのではないでしょう。自分で独自の目標を決め、予定を立て、それを達成することが好きでした。もつとも、毗まぢりを決してという風情ではなく、寄り道もおおいに楽しんでおりましたが。

すでにお察しかと思いますが、「おやじの背中」を見ながら育つた身として、私自身も単独行を好んできました。単独行に伴う困難・危険はもとより自覚しておりますが、人と連れだって登る時とは違う独特の充実感もいちおうは理解しているつもりです。

先に記したように、亡くなる約一週間前、父は道志川との合流点まで行く予定について語りました。その際、家族のいずれもが共通して抱いたのは、これほど明朗闊達に話す父を見たことがないという印象でした（それ以前は暗くしていたというわけではありませんが）。

屋外の道を歩く予定を自ら立てて実行し、首尾よく目的地に達した父は、心の底から達成感を味わったと思います。このことに何の疑いも持つておりません。その後に「瞬」しまった「いけない」と感じたかもしれませんのが、単独行を続けていれば、一定の確率で起こりうる事態であることは、それ以前から漠然とではあれ自覚していたでしょう。

ただ、今回最後にたどつたのは、本来足を踏み入れるべきでない危険な個所でした。故人に対するは厳しい言い方ですが、本人の判断の誤りと言ふほかありません。行き先を明言しなかつたことも含め、家族だけならまだしも、針葉樹会の皆様をはじめ様々な方々に

迷惑をおかけしたことは、重ねて申し訳ありません。もう一つ感謝の念を記したいことがあります。

■平成21年10月19日■

三月会通信

【出席者】 佐薙 三井 遠藤 高橋 蝶川

竹中 小島 三森 中村（雅） 高崎（俊）

記録担当の本間さんは、当日、谷川岳（三国峠）の縦走に出かけて欠席でした。これで白毛門から三国峠までの国境稜線の縦走を完遂させたそうで、まずはおめでとうございます。山に目を向ける大きなきつかけになつたという意味で、ありがたい邂逅でした。同11号（？）には、石井さんが戦中の一橋山岳会についての回想を寄せておられます。それによると、父は敗戦直前まで召集されず、一人で部室を守つたとのこと。運のいい人だったのでしょうか。

そういうわけで、高崎（俊）さんが臨時の記録係を務めてくれました。高崎さんは翌日には記録を完成したのですが、「体力の限界」を理由に？ 本間さんによる原稿が遅れました。同じく限界状態ではありますが、蛭川がアンカー役を買って出て、こうして若干のアレンジを加えて、以下報告する次第。

●話題

竹中さんが10月18日（日）、南アルプス市制6周年記念式典に出席され、針葉樹会として功績者表彰を受賞した。表彰事由は「南

アルプス芦安山岳館」に「針葉樹文庫」の形で642冊の山岳書籍を寄贈したこと。詳細は、HPで報告されました。

三森さんが音頭を取つて進めているヒマラ

ヤ・トレッキング行が、いよいよ10月25日（日）に出発。参加者は他に小島さん、岡田さん。土産話が楽しみ。

11月11日に懇親山行で高麗山（平塚市）が計画されている（山崎さん追悼）。去る7月に亡くなられた山崎さんもしばしばウォーキングされていました。また、会の大先輩、近藤さんがかつて毎日歩いておられたというコース。

Climbing, Trekking, Walking, Mountaineering ——それぞれの本来の意味は何だろうか？が話題になつた。補足：日本語の「のぼる」のつもりで「climb」を使うと、ときに英米人は意味を誤解することがあります（蛭川）。

来年の9月にアメリカ在住の加地さんと、ドロミテをトレッキングする計画あり、参加者募集中。期間が2週間で少し長めのため、躊躇されている方々がありそう。

● 山行記録
遠藤 8月 グランド・ティトン（アメリカン・ロッキー）。4000mクラスの山懷で魚釣り。

？ 棒の折山。雨中登山のトレーニング

10／17 秋田県森吉山（1420m）で

全盛の紅葉。いいですね。昨年近くまで行きましたが、大雨で泣く泣く断念しました（蛭川）。

10／18 景信山

三井 10／21 会津朝日岳に行く予定だったが、家の建て替え・引っ越しが延期したためキャンセル。

佐薙 10月 ナメトコ山、早池峰山（特別会員山崎さん、蛭川さん夫妻）

中村（雅） 10／12 北藏王連峰。笛谷峠—雁戸山—八方平避難小屋

10／13 八方平避難小屋—名号峰—熊の岳—刈田岳—刈田岳避難小屋

10／14 刈田岳避難小屋—杉の峰—芝草平—屏風岳—不忘山—南藏王登山口—吉沼

小島 10／12 安達太良山—鉄山—箕輪山—鬼面山。故郷の山は懐かしいでしょう（蛭川）。

高崎 9／5 赤岳（南沢—行者小屋—文三郎尾根—赤岳—地蔵尾根—行者—赤岳鉢泉

10／16 編笠山（観音平—編笠山—青年小屋—押手川—観音平）

三森 9／6・7 戸隠泊、めのう山—飯縄

山 越水ヶ原 横の木山荘（徳武和彦さん）泊。素晴らしいガイド、ビスタク会おばさん達と戸隠うずら屋のそば。

10／7・8 上高地。台風の中を西糸屋山荘泊。雨中、明神まで往復するのがやつと夜停電。松本／武石村友人宅。そういえば、来年の三四郎会は、三森さんが幹事でした。場所は上高地／西糸屋で決まりですか（蛭川）。

蛭川 10／2～4

ナメトコ山（宮沢賢治の山）。佐薙さん、山崎さんと。

10／5～6 早池峰。佐薙さん、紀巳子と。

宮沢賢治が描いたフクロウの絵のカードを記念館で買って満足。山崎さんは、神楽に取り付かれて、後日また岩手詣でをしたそうです（蛭川）。

高橋 9月下旬 標高779m、正丸峠駅から登る。高山不動を経て展望台へ。

● 山行計画

高橋 10／29 鍋割山。丹沢、クラスメートと4人で。

三森 10／25、エベレスト街道。エベレスト・ビュー・ホテル、アンナブルナ、ダウラギリ見物。小島さん夫妻、岡田さん、私達夫婦他9名のバーつい。

11／9～25 延長で一人残りヒドゥンバ

レー（未確定）～フレンチ峠（ダウラギリ領域）。

蛭川 11／11 高麗山（山崎さん追悼）

11／21～22 三頭山～奥多摩湖。高校岳友など。

小島 エベレスト街道。三森さんに同行。

中村（雅） 10／22 五日市一日の出山～御嶽山～大岳（往復）。小学校同級生と。

佐薙 11／11 懇親山行 高麗山
三井 11／11 高麗山

■平成21年11月19日■

【出席者】 中川 三井 遠藤 高橋 竹中

本間 小島 高崎（俊） 蛭川（記録）

●話題

記録担当を本間さんから蛭川が引き継ぎました。本間さんは、しばらくお休みするそうです。「本間さんのいなない三月会なんて」という声も聞こえています。常連の佐薙さんが欠席。さては12月の富士山検定に備えて猛勉強中かと思つたら、オーション会の東海道ウォーキング最終日と重なつたからだそうですね。祇園でにぎやかに打ち上げをされたかどうかは不明ですが、ともあれ完走ならぬ完歩

おめでとうございます。裏話でも聞きたいものです。

関恒義先生（元一橋山岳部部長）＝「病気で長期入院中と高崎総務幹事から報告されました。ご快復を祈りたいと思います。

ネバール・トレッキング＝ひどい下痢に見舞われたが、ただ一人、小島夫人だけはなんともなかつたそうです。岡田さんも体調不良とカメラ不調に悩まされた由。もつと山に行つて（トレーニングをして）再挑戦しましょ

う。残つて彷徨を続けた三森さんも帰国されたそうです。お三方には12月に揃つて出席され、面白い土産話をご披露願いたいものです。第10回ライチヨウ会議 東京大会＝高橋さんから「参加者にその様子を聞きたい」との発言。佐薙さん、参加されましたでしょうか。ちなみに午後のシンポジウムは「日本のライチョウは守れるか？ 山で増やすか、飼つて殖やすか」です。増と殖の使い分けが面白い。

竹中 なし ちょっと体調をくずして、お休み。：懇親山行（高麗山）中止は残念。来年2月ごろ、復活させる予定です（蛭川）。

高橋 11／15 星ヶ山山麓（根府川～白銀林道～箱根湯本）。一度歩いてみたいと思つてこのルートを家内と歩きました（戦時中、根府川に疎開していたので）。：星ヶ山は聞き慣れない山ですが『コンサイス山名辞典』に出ています。標高815m（蛭川）

竹中 なし ちょっと体調をくずして、お休み。：懇親山行（高麗山）中止は残念。来年2月ごろ、復活させる予定です（蛭川）。

蛭川 10／31～11／1 ペテカリ山荘の小屋納め。静内山岳会の定例行事。山荘の大掃除、薪作り、登山道の笹刈りなど。ペテカリと濁ることが多いのですが、地元ではペテカリと清音。その方がアイヌ語の発音に近いからだそうです。

11／21～22 秋川の「蛇の湯」泊。高校岳友など。三頭山から奥多摩湖に抜ける予定だったが、降雨の予報に、三頭大滝を見物して解散。

本間 10／18～21 谷川連峰縦走。天神平～肩ノ小屋～平標小屋～法師温泉。住吉高校山岳部OB3人と。谷川～平標は長いですね。下りの階段もきつい。
遠藤 ？ 昭和37年卒の同期ハイキング会。棒ノ嶺、景信山。（参考）南面のゴンジリ沢

遠藤 ？ 昭和37年卒の同期ハイキング会。

棒ノ嶺、景信山。（参考）南面のゴンジリ沢

遠藤 ？ 昭和37年卒の同期ハイキング会。

棒ノ嶺、景信山。（参考）南面のゴンジリ沢

小島 10 / 25 ~ 11 / 8 三森さん企画のネ
パール・トレッキング。天候に恵まれ、エ
ベレスト、ローツエ、アンナブルナ、ダウ
ラギリを楽しみました。

● 山行計画

高橋 11 / 23 天城山。クラスメート4人
と。前日、伊豆高原駅近くで一泊。百名山
で登ったが、再挑戦する。その他の方は、
すべて「なし」です。冬枯れですかね。景
気の二番底みたい。

中村（雅） 会社同僚と茅ヶ岳を計画中と聞
きました。

金子 年末年始に吊尾根から北岳往復と聞き
ました。最近欠席が続いているですが、この
元気で三月会を刺激してほしいものです
(蛭川)。

■ 平成 21 年 12 月 19 日 ■

【出席者】 佐薙 中川 三井 遠藤 高橋
竹中 小島 三森 高崎（俊） 岡田 中
村（雅） 金子 蛭川（記録）

13 名の参加を得て、わいわい賑やかにやり

ました。

オーション会東海道ウォーキング 2月から始
めて、11 / 19 に終点の三条大橋に到達。お
めでとうございます！ 465 km を 8 回、延
べ 19 日間で歩いたそうです。単純平均で 25
km / 日（昔は 12 日間、39 km / 日）。来年の
ウォーキングは、千国街道（塩の道）糸魚川～松
本 130 km。今度はオーション会員でなくとも
も参加できるそうです。

高崎酒造が快挙！ 第 29 回全国酒類コン
クールの芋焼酎部門で、「黒甘露」「しま甘
露」「しまむらさき」が上位三位を独占。高崎
治郎さん、競馬の三連複入賞おめでとうござ
います。三月会で愛飲している「しま茜」が
入っていないのは残念ですが。快挙の陰に、
本間サポーターの貢献あり（毎月、一升瓶 6
本をお取り寄せ）。

ヒマラヤ・トレッキング！ 岡田さんは、高
山病、下痢、睡眠不良に悩まされ続けたそ
うです。その理由として皆さんのが勝手に指摘し
たのは、肺活量の不足、気管支炎、気にしす
ぎ（眠れなくても気にしない方がいい）など。
一行は岡田さんを除いて奥さん同伴。それが
不調の原因との声もあり。「三森さんがネ
パール語をあやつっているので驚いた」（岡
田）に対しても、「それは風貌からして当然」
(陰の声)。その三森さんの話では、なんとジョ

ムスンまでバスで行けるようになつた。イン
ドと中国の援助合戦でどんどん道がよくなつ
ているそうです。

第 10 回ライチヨウ会議 東京大会＝高橋さ

んが前月気にしていた会議ですが、参加され
た佐薙さんから報告がありました。北岳や仙
丈岳ではずいぶん減つていて、それはカール
の高山植物が減つていているから。最終的には、
ニホンシカによる食害にいきつく。ライチヨ
ウが絶滅危惧種に指定されないのは、緊急性
のレベルが低いからだそうです。分厚い会議
資料をうれしそうに持ち帰った高橋さん、來
月は勉強成果を発表してください。

話題は、片山右京一行の富士山での遭難（彼
は責められるべきか）、富士山検定、都会での
登山トレーニング方法などにも及びました
が、長くなるので割愛します。

● 山行記録

佐薙 11 / 16 ~ 19 東海道ウォーキング（オー
ション会行事）

12 / 9 高麗山。自宅近くの老人を連れて
歩いた。
遠藤 ? 小河内古道。友人とハイキング。
：小河内古道は奥多摩駅～奥多摩湖の 9 km
の古道。旧青梅街道、甲州裏街道とも呼ば
れる（蛭川）。

● 話題

高橋 12／初旬 石橋山～石垣山（一夜城

址）。早川で降りて、源頼朝の旗揚げの地である石橋山へ。そこから丘陵を越えて、石垣山に登った（家内と二人で）。

竹中 11／19 多摩境～多摩センターのハイキング（公園巡り）如水会町田支部歩こう会の行事。

岡田 10／25～11／8 エベレスト街道トレッキング。カリガングリ流域のダウラギリ、ミルギリ山麓。下痢に悩まされましたが、また行きたいです。40年前のニコンF

（完全マニュアル）でヒマラヤの山々に向かい合つたが、シャッタースピード、絞りのデータをどうすべきかで、ずいぶん悩みました。

中村（雅） 12／2 霧訪山。蛭川・本間と快晴で360度の大展望！ 槍・穂高連峰に感動しました。

12／17 茅ヶ岳～金ヶ岳～明野太陽館。

蛭川さんお勧めのコース。単独行。

金子 11／28 秋川渓谷。元の会社の連中とハイキング+温泉。

● 山行計画

三井 12／23 7人で。 九鬼山。大学時代の仲間と金子 12／26～30 池山吊尾根より北岳往

復。ここ数年、冬の甲斐駒、仙丈とチャレンジしてきたが、その集大成。新宿高校OB、香港の岳友と。計画では本日下山。無事に芦安に戻つてることを祈ります。

三森 12／23～24 寄から鍋割山。老人会の忘年会登山。

佐羅 12／29 小丸から鍋割山。本間、蛭川と。備考：その後、蛭川は風邪でダウンし、不参加。

△ 10月または11月 日帰り・箱根方面（幹事：未定）

● 懇親山行計画

山行幹事から、2010年の懇親山行の計画が発表（予告）されました。今から予定を組んで、ふるつてご参加ください。なお、恒例のアダージオ懇親山行は、2010年は「一時休み」とします。

▽ 2月10日（水） 湘南の高麗山 （幹事：佐羅）

昨年11月は雨で流れましたが、再度計画しました。今度こそ白銀の富士山の景観を期待しましょう。

▽ 5月22日（土）～23日（日）

①武甲山 ②秩父御岳山（幹事：蛭川）宿泊は、鳩の湯（日本秘湯を守る会）。初日の武甲山日帰り参加の方も大歓迎。秩父御岳山は、普寛行者（木曾御嶽山王滝口の開祖）が、生まれ故郷に開山した山です。標高10

81m。

▽ 8月後半または9月前半 一泊二日 苗場山（幹事：三井）

和田小屋から入り、神楽ヶ峰を経て苗場山頂ヒュッテに泊まります（食事付き）。翌日、秋山郷（小赤石沢）に下り、帰宅。オブショーンとして、2日目に屋敷温泉に泊まり、3日目に鳥甲山に登り帰宅。

△ 10月または11月 日帰り・箱根方面（幹事：未定）

● 2010年の夢と抱負

佐羅：未だトレースしていないアルプスの主稜線を歩いてみたい。

①北アルプスの唐松～白馬（不帰キレット）、②黒部五郎岳（春日井さん追悼）、③中アルプスの空木～越百。それに、来年も富士山には何度もみたい。

中川：いろいろ忙しいが、なんとか懸案の北岳バットレスを（「10月ですかね」と金子さん）。

三井：百名山の残りの三つをなんとか終えたい。それとしぶいところで、奥美濃の山々（猿ヶ馬場山1827m、野伏ヶ岳1674m）。海外ではキナバル。遠藤：宮之浦岳。どなたかお付き合いいただきたい。海外では、南米と言いたいが、まだ

ず韓国の山。

高橋・ボランティア活動を三つもやつていて忙しいが、月1回のベースは守りたい（特に里山から奥山に至るエリア）。

竹中・北ア、特に懐かしの穂高周辺。「三四郎

会は6／4西糸屋泊まりでやります。その時を使ってどうぞ」（三森幹事）。南アでは

小島・多忙な身で早退されたので、聞き漏ら

しました（蛭川）。

三森・弱い人と行くと元気が出ることがわかれました。今後は強い人との山行を少なく

したい。おばさんの岳友と2月の八ヶ岳。

九州・高千穂にゆつくりと行きたい。三四

郎会では、徳本峠を越えて帰りたい。海外

では、懸案のラップチエ5800m。「再来年

に行きませんか」（金子）。

高崎（俊）・奥穂高。「岳沢ヒュッテが部分再建されるらしい」（竹中）。

岡田・もう一度ヒマラヤトレッキング。50

00mまで到達したい。雪の八ヶ岳（3月

の赤岳や西天狗岳）。

中村（雅）・①7月の旭岳、トムラウシ縦走。息子さんと。②8月中旬の黒部源流（赤木沢）・赤牛岳。小島さん、川名さんと。③海外では、憧れのヒマラヤ・トレッキング。奥さんと。

金子：『大都会のアルプス 香港』1500円

の発刊。「発刊記念に香港アルプスのツアーレイントを計画してほしい」（三森さん）。

●倉知さんの力稿について

小島会報編集長から、倉知さんの力作原稿

4編
①一橋山岳部の初期十年・珠玉山行記録十選

②小谷部全助山行譜

③一橋山岳部1940年代の山行記録

④1960年代の記録

が届いていると紹介されました。提案趣意は、次のことおり。

「歴史を反映した、山岳団体らしい会報になつてほしい」との希望を込めて、「特記すべき一橋山岳部の記録の再認識」という趣旨で、関係者の意見も入れて会報への掲載を検討してはどうか。

上記4編に、⑤海外遠征の記録を加えれば、一橋山岳部の山行記録としてのシリーズになるのではないか。

小島編集長としては、会長・副会長・HP幹事・倉知さんと同年代の中川さん、有賀さんなどに原稿のコピーを配布して、これら会員の意見と補足も入れて来年度の会報に連載したい。

■平成22年1月19日■

【出席者】 佐薙 三井 高橋 三森 高崎

(俊) 佐藤(久) 岡田 西牟田 蛭川(記録)

常連の竹中さん、小島さんが欠席でしたが、久しぶりに佐藤（久）さんと西牟田さんが出席されました。

インド・ヒマラヤ彷徨Ⅱ佐藤さん、昨年9月中旬ごろ一ヶ月にわたりインド・ヒマラヤを西から東へ単独で旅したそうです。ガンジス川三大源流を渡つたり遡つたり、3000円ぐらい払つてジープで5600m

(motorable highest point、その向こうはカラコルム) を往復。door to doorでトータル26万円であがつたが（安い！）、戒律で酒は飲めないし、一泊1000円の宿に泊まります。荷物は15kgぐらい。今年の秋にはカラパタールに行きたいそうです。同じ目標の岡田さんと一緒にどうぞ。

ライチヨウ談義Ⅱ 11月から続いている話題です。大町山岳博物館は財政難から？ライチヨウ飼育をやめました。上野動物園ではまだ飼育継続中だが、なんとノルウェーのライチヨウ（どうせなら日本のライチヨウにすればいいのに）。なお、高橋さんは、佐薙さんか

ら借りた分厚い第10回ライチョウ会議の資料を読みとおしたそうです。

三森宅に飛来した野鳥について、三森さん一枚の写真を取りだし佐薙博士に鳥名を聞いた。「海鳥だな、サギの仲間かな」とのお答えに、「さすが日本野鳥の会ですね」と予備調査をしてきた三森さん感服。「ゴイサギ」の幼鳥だそうです。ゴイサギの「ゴイ」とは何だ、日本語教師だから知っているだろうと、佐薙さんが突然私にふりましたが、知るわけもありません。帰宅後調べたら「五位」。詳細は、末尾を参照ください（蛭川）。

中山道のルート②信州側から木曽側に抜けたルート（和田峠を越えたのかどうか）がひときり話題になりました。地元の松尾さんご存知ないですか。関連して補足。霧訪山の麓の小野宿には、「初期中山道」の標識があります。中山道は、最初は下諏訪から西南西に小野宿を経由して木曽側の賀茂川に抜けていたのですが、十数年で西北西に下諏訪へ塩尻へ賀茂川と小野宿を迂回するルートに変更されたからです。中山道を踏破された石井さんと山崎さんは、どちらのルートを辿ったのでしょうか（蛭川）。

三四郎会（6月4日の上高地にて） 16人
も参加予定のこと。幹事（三森さん）と場所選定がよかつたのですね。返事をしていない

のは蛭川と本間だけとのこと。すみません。

●山行記録

佐薙 12 / 29 丹沢忘年山行（小丸）。本間さんと。

三井 12 / 23 九鬼山。昭和37年卒の同期6人と。

蛭川 なし 小丸同行を予定していたが、ひどい風邪で叶わず。

三森 12 / 24 寄から単独で鍋割山を往復（前夜、老岳友との忘年会）。

西牟田 1 / 17 日の出山～つるつる温泉～五日市駅。麗山会（JAC 2003年同期会）の行事。

欠席のお二人のメールから：

中村（雅）さんは、1月16日に、四方津駅～高柄山～上野原を歩いたそうです（単独行）。

金子さんは、昨年末池山吊尾根から北岳往復に成功。「73年も前にこの道を小谷部さん、望月さんたちが歩いたことにただただ感心しながら歩きました」と便りがありました。

三森 1 / 30 ~ 31 三頭山。蛭川・長澤・

中村（雅）と。蛇の湯温泉「たから荘」で

温泉と地酒も楽しむ。話を聞いて佐藤（久）も席上で参加申し出あります。

2 / 14 ~ 16 八ヶ岳赤岳。ヒマ観催行のツアーリに参加。

岡田 3月初め 八ヶ岳赤岳。佐薙さんと高崎（俊）もこの時期の八ヶ岳興味あり。

蛭川 1 / 30 ~ 三頭山。三森さんと同じ。西牟田 2 / 14 寅年にちなみ、虎秀山。麗山会の還暦を迎える女性4人が計画。聞いたことがない山ですが、コシユウサンと呼ぶ、西武秩父線東吾野駅近くの320mの山。

注 ゴイサギ：醍醐天皇が神泉苑の御遊の時、五位を受けた故事によるという。御遊とは宮中・院中で催された管弦・朗詠の遊び（いずれも『大辞林』より）。

●山行計画

三井 1 / 29 篠坂峠～三国山。昭和37年

卒の同期4人と。

高橋 1 / 25 高尾山。クラスメートと。

トピック

■中村保氏、スポーツグランプリ受賞

中村保さん（昭33）が昨年9月26日に第64回国民体育大会（国体）の開催地・新潟で「第4回スポーツグランプリ」を受賞しました。グランプリ授与の趣旨は「長年にわたりスポーツを実践し、現在も継続して活動し、中高年年齢層の顕著な記録や実績を上げるなど、国内外で高い評価を得た方に対して、その功績を讃え表彰する」というものです。受賞に際して中村さんから次のようなメッセージをいただきました。

「山岳部門の受賞は今回が初めてで、日本山岳協会の推薦のお陰によります。

今回の受賞の理由は、18年にわたる東チベットの未踏域探査と記録・地図の内外への発信、日本人初の英國王立地理学協会のメダル受賞です。今回の受賞者は、水泳・ラグビー・テニス・馬術・卓球・重量挙げ・陸上競技・山岳の部門から9名が選ばれました。年齢は74歳から103歳までの『生涯現役』組です。

ご臨席の天皇陛下とお話する機会も賜わり、東チベットに関する質問にお答えしました。このような栄誉を頂くことができた背

景には針葉樹会というベースキャンプがあり、良き仲間に恵まれたことの素晴らしさと幸せを感じます。有難うございます」。

■針葉樹会が南アルプス市から功績者表彰を受ける

昨年10月18日（日）、南アルプス市の桃源文化会館での南アルプス市市制6周年記念式典において、針葉樹会が功績者表彰を受賞し、竹中が参列して今沢市長から額（賞の記念品）に入った表彰状を受け取りました。

表彰事由は多額寄付者としてであり、本年

「南アルプス芦安山岳」に「針葉樹文庫」の形で642冊の山岳書籍を寄贈したことが挙げられております。

関係者等200人程度が着席する中で、今

沢市長から表彰対象となつた16名1団体が紹介された。この日の表彰対象者は市会議員、職員等OB12名の他は、地元南アルプス市出身で自身の水彩画100点を寄付した画家・山田耕三氏、アカデミー賞受賞作品「おくりびと」のプロデューサー中澤敏明氏、明大OBで8000m峰14座中8座登頂の故加藤秋山郷（小赤石沢）に下り、帰宅。オブショーンとして、2日目に屋敷温泉に泊まり、3日目に鳥甲山に登り帰宅。

葉樹会だつた。（竹中 彰）

■2010年の懇親山行（予告）

山行幹事

2010年の懇親山行は、4回を予定しています（第1回2月は実施済み）。今から予定を組んでいただき、ふるつてご参加ください。いずれも、詳細は、マーリング・リスト（ML）で連絡します。（MLに加入していない方は、お手数ですが、担当幹事にお問い合わせください）。

なお、恒例のアダージオ懇親山行は、今年は「一時休み」とします。

●5月22日（土）～23日（日）①武甲山

②秩父御岳山 〈幹事：蛭川〉

宿泊は、鳩の湯（日本秘湯を守る会）。初日の武甲山日帰り参加の方も大歓迎。秩父御岳山は、普寛行者（木曽御嶽山王滝口の開祖）が生まれ故郷に開山した山です。標高1081m。●8月後半または9月前半 一泊二日 苗場山 〈幹事：三井〉

和田小屋から入り、神楽ヶ峰を経て苗場山頂ヒュッテに泊まります（食事付き）。翌日、秋山郷（小赤石沢）に下り、帰宅。オブショーンとして、2日目に屋敷温泉に泊まり、3日目に鳥甲山に登り帰宅。

●10月または11月 日帰り・箱根方面 〈幹事：未定〉

平成22年度会費納入のお願い

平成22年度の会費納入をお願い致します。納入状況等に関するお問合せがありましたら会計幹事までEメール／電話にてお問合せ下さい。

◇会費納入先銀行口座

(1) 銀行名 三菱東京UFJ銀行 赤坂支店
(2) 口座名 針葉樹会
(3) 口座番号 普通口座 4825647
(4) 振込時「摘要欄」にお名前(卒年次)を「ミヤシタ(S57)」等記入下さい。

◇会費額 卒業年次によって左記のようになつています。

①昭29年以前の卒業(昭29を含む) 免除
②昭30~42年の卒業 4000円
③昭43~62年の卒業 6000円
④昭63年以降の卒業 5000円

◇幹事連絡先

宮下 克彦(昭57卒)

E-Mail Kat.Miyashita@mitsui-steel.com

電話(会社) 03-5544-6925
Fax(会社) 03-5544-6483
(三井物産スチール・第一部門造船鋼材部)

編集後記

本号は山崎先輩の追悼号として一月に予定いたしておりましたが、私の体調不良もあって二ヶ月ほど遅れての発行となりました。早くに原稿を用意頂いた皆様、そして会報をお待ちの会員の皆様にお詫び申し上げます。

山崎先輩の想い出は四人の会員と御子息に語っていますが、懇親山行で楽しく御一緒させて頂いた日が昨日のように思われ、山崎先輩の御冥福を心からお祈り申し上げます。

中村先輩の昨秋の東チベット踏査行と澤木先輩の現役時代の想い出という二つの力作で追悼に花を添えて頂き、本号も中身の濃いものになり、会員の皆様にはじっくり読んで頂けると思います。また、お寄せ頂いた原稿の幾つかは次号に回させて頂きましたが、お許し頂きたいたと思います。

(小島)

【お詫びと訂正】

116号の加藤博行氏の「二〇〇九年三月妙高山スキーロード」の文章に編集のミスで誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

5ページ2段目2行目。「古くは『頸城』と呼ばれ、州と後の県境を……」とあるのを、「古くは『上越後』と呼ばれ、上州と越後の県境を」に訂正して下さい。

同じく最終行から5行目。「埼玉県柏市」とあるのを「千葉県柏市」に訂正して下さい。

今、編集している子ども向けの雑誌「月刊ジュニアエラ」(4月号)で遺伝子の特集を担当しました。ヒトゲノムが解読され、遺伝子の解明が着々と進んでいます。山登りと関係がありそなのは「スポーツ遺伝子」。11番染色体にある「ACTN3」という遺伝子には三つの型があり、「RR—瞬発力系に有利」「XX—持久力系に有利」「RX—どちらも有利」とスポーツの適性にかかわるといいます。ジ

ヤマイカのスプリンターにはRR型が多いとNHKで放送もしていました。山岳部OBはやはりXX型が多いのでしょうか? 「スポーツ遺伝子テスト」(1件1万8900円)を受けて確かめることもできますが、遺伝子はさまざま要因が絡み合って顕在化する・しないが決まるそうです。その結果がすべてではないそうです。

(川名)

(井草)